

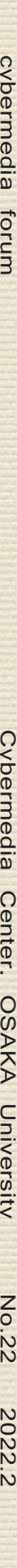
cybermedia forum

February 2022

no.22



Cybermedia Center
OSAKA University



◆◆◆ 目 次 ◆◆◆

巻 頭 言「コロナ禍は未だ続く」	浦西 友樹	1
特 集：システムベンダから見たコロナ禍		3
・ コロナ禍における LMS の活用について	アシストマイクロ株式会社 岩沢 哲之	5
・ コロナ禍に求められるシステムベンダの役割	SCSK 株式会社 鐘ヶ江 力	9
活 動 報 告		13
◇教育用計算機システム関係		
（情報教育システム）		
・ 2020 年度情報教育システム利用状況		15
・ 情報教育関連の講習会・説明会・見学会等の開催報告		21
（CALL システム）		
・ 2020 年度 CALL システム利用状況		23
・ CALL 関連の講習会・説明会・見学会等の開催報告		29
（箕面教育システム）		
・ 2020 年度箕面教育システム利用状況		31
◇2020 年度会議関係等日誌		
・ 会議関係・大規模計算機システム利用講習会・センター来訪者		35
利 用 案 内		37
◇教育用計算機システムの利用案内等		
・ 教育用計算機システムの利用案内		39
・ 2021 年度情報教育教室使用計画表		40
・ 2021 年度 CALL 教室使用計画表		44
・ 情報教育システム 分散配置端末部局別責任者名簿		47
・ 教室・端末配置図		48
◇規程集		
・ 大阪大学サイバーメディアセンター教育用計算機システム利用規程		50
・ 教育用計算機システム、学生用電子メールシステム利用者ガイドライン		50
・ 大阪大学総合情報通信システム利用者ガイドライン		53

コロナ禍は未だ続く

サイバーメディアセンター 情報メディア教育研究部門
准教授 浦西 友樹

未だ世の中は COVID-19 の影響を受けている。2019 年末ごろから始まったこの未曾有の出来事は、世の中の流れを全て変え、2020 年には「2021 年にはなんとか元の生活を…」と念じながら自粛生活を送る日々であった。日本国内においては 2021 年の春過ぎからワクチン接種が進み、2021 年秋にはいったん収束の兆しを見せたものの、2022 年始にはオミクロン株の置き換えによって感染者数が爆発的に増加し、2020 年の悪夢が脳裏をよぎる状況となっている。

一方で教育に目を向けてみると、2020 年度より大学の授業は全面オンライン化に移行した。それに伴って、大学教員は必死の思いでオンライン授業へ順応し、結果として大学教員のオンライン授業に関するリテラシーやスキルが飛躍的に向上したことは疑う余地がない。テレビ番組やインターネットでは、大学教員により「最近の大学教員の仕事はほぼ YouTuber と同じ」と語られることがあるが、まさにその言葉は正鵠を射ており、今日の大学教員が有する録音・映像編集・配信のスキルはコロナ禍以前と比較して劇的に向上していると言えよう。

さて、オンライン授業においては、一授業あたり多ければ数百人、時には数千人の受講者に向けた動画配信および教材の配布が必要となる。例えば本学の学生数は、学部生 15,075 名、大学院生 8,151 名（令和 3 年 5 月 1 日現在、以下同様）を数え、旧帝大で最多である。また、教員の数も 3,357 名（非常勤を除く）であり、合計すると本学におけるプラットフォームのユーザー総数は 25,000 名を優に超える。一方で 2021 年度に開講され、本学の Learning Management System (LMS) である大阪大学 CLE に登録されている授業数は 7,078 であり、同時に利用するユーザーの数も 10,000 に迫ることが多く、システムには多大な負荷がかかる。その一方で、学生の成績評価に直結するため、LMS を用いて実施させるオンライン試

験におけるシステムの安定性やセキュリティ、さらには学部を問わず多くのユーザーが利用するにあたってのユーザーインターフェースのわかりやすさなど、システムへの要求は数多い。

本学の LMS である大阪大学 CLE は 2013 年に旧 WebCT を引き継いで、Blackboard Learn を用いたサービスを開始しており、コロナ禍の直前である 2020 年 3 月からクラウドサービスに全面移行した。また、講義収録配信システム Echo についても 2017 年よりクラウドサービスに移行しており、先進的なクラウドベースのサービスを全学規模で提供し続けている。本学においてはコロナ禍以前よりオンライン授業に関わるシステム運用のノウハウが蓄積していたことから、2020 年にオンライン授業に急激に移行した際においても、システムの完全停止を伴う大規模障害を一度も発生させなかった点は、本学システムの安定性を証明する事実である。

このような状況においてシステムを安定稼働させた事実は、システムベンダの多大なる貢献なしに語ることは不可能である。平時よりコロナ禍の大変な状況に至るまで、本学の教育システムの運営に協力いただいているシステムベンダ各社には感謝の念に堪えない。本年の特集においては、大阪大学 CLE をサポートするアシストマイクロ社、講義収録配信システム Echo をサポートする SCSK 社に、「システムベンダから見たコロナ禍」と題して、苦勞された点や工夫された点について語っていただいた。大学教員には気付かない苦勞や、コロナ禍においてシステムベンダが行った運用上の工夫などについて、貴重な声をお聞かせいただけた。読者諸氏が本特集から何かを得ることができれば大変幸いである。

特集：システムベンダから見たコロナ禍

コロナ禍における LMS の活用について----- 5

アシストマイクロ株式会社

Learning Solution Group

岩沢 哲之

コロナ禍に求められるシステムベンダの役割----- 9

SCSK 株式会社

産業事業グループ 産業ソリューション事業本部

産業ソリューション第一部 文教サービス課

鐘ヶ江 力

コロナ禍における LMS の活用について

アシストマイクロ株式会社

Learning Solution Group

岩沢 哲之

1. はじめに

コロナ禍において、貴学をはじめ大学関係者の皆様には大変なご苦勞があったことと存じます。

中でも授業支援システム CLE (Blackboard Learn) の運用を司るサイバーメディアセンター教職員の方々の多大なるご尽力に御礼申し上げます。

本稿では、コロナ禍における LMS (Learning Management System : 学習管理システム) の活用について当社の視点で考察します。

2. コロナ対応のはじまり

2020 年 3 月下旬から 4 月上旬に掛け、Blackboard Learn をオンプレミス (サーバ、ソフトウェアなどの情報システムを機関が管理する設備内に設置し、運用する形態) 環境でご利用のお客様から自学で利用している LMS がどの程度の同時接続に耐えられるのかのお問い合わせ、ならびに貴学でもご利用いただいているオンライン講義システムである Blackboard Collaborate Ultra に関するお問い合わせが急激に増えることとなった。

オンプレミス環境のお客様では、学内のサーバ環境のシステムリソースに限りがあり、オンライン授業に移行した際の利用に耐えられないとの判断から、急遽、オンプレミス環境から SaaS (クラウド環境上のソフトウェアをインターネット等のネットワーク経由で利用者がサービスとして利用する形態) 環境への移行を決定されることとなった。

通常、オンプレミス環境から SaaS 環境への移行は半年程度を掛け、計画的に実施されるが、

- SaaS 環境の準備およびシステム設定
- 教務システムとの連携
- Zoom や Blackboard Collaborate Ultra 等のオンライン講義システムやその他の教育ツールとの

連携

- オンプレミス環境でご利用のお客様のシステムリソースの拡張およびメンテナンス

等々

を授業開始までに実施するということと相成った。

教職員の方々におかれても、オンラインでの授業のための準備に奔走されたことと推察するが、当社の技術メンバーにおいても怒涛の数ヶ月間を過ごすこととなった。

3. オンライン学習と緊急遠隔教育

ユネスコの報告によると、190 カ国、19 億人以上の学生が新型コロナウイルス感染症対策のために対面式からオンライン形式への教育方法の移行を余儀なくされ、駆け足で進んだオンライン授業への対応であるが、コロナ禍におけるオンライン授業は、緊急遠隔教育 (Emergency Remote Learning / Emergency Remote Teaching) と呼ばれ、コロナ発生以前に実践されていたオンライン学習とは異なるものと考えられる。

緊急遠隔教育では、多くの教育現場において従来の対面型授業を、Zoom 等のオンライン講義システムを利用して実施されることが多く、LMS の導入がない教育機関においては課題レポートをメール等で収集して終了とされるケースもあり、課題レポートでの評価が主体となるため、コロナ発生前よりも全体的に学生の成績が良くなっているとの報告も寄せられている。また海外においても学生の評価が困難であることから、レターグレード (S、A、B 等の評価) を諦め、合格/不合格のみの評価を行う機関もあると聞き及ぶ。

欧米では、以前から LMS の活用が進められ、日本と比べ一日の長があると考えていたが、コロナ禍に

おける緊急遠隔教育は海外においても同様の対応が求められた様である。

Blackboard 社の 2021 年 3 月の報告においても、オンライン講義システムである Blackboard Collaborate Ultra の利用は 4,800%増、LMS である Blackboard Learn の利用は 400%増と高水準であった。一方、モバイルアプリケーションの利用は 39%増となっており、コロナ禍で外出や移動を伴わないため多くが PC の利用であり、スマートフォン等のモバイルデバイスによる利用が高くなかったものと推察される。



図 1 : Blackboard 社インフォグラフィック

日本のお客様においても、利用の増加傾向は同様であり、中でも教員の方の大幅な利用増が確認されている。学生は以前から LMS を活用している教員の授業を履修するケースがある一方、コロナ禍でオンライン授業の実施に際して、これまで LMS を利用していなかった教員が LMS を利用することに起因していると考えられる。

利用の増加傾向は、対面授業が再開された 2021 年度においても、2020 年度と同等の水準となっており、一部の授業でのオンデマンド化や、ハイブリッド/ハイフレックス型授業によるものと考えられるが、LMS を提供するベンダーとしては、対面型授業を実施している場合でも、ブレンDED学習として LMS を活用いただけたら嬉しい限りである。

LMS の利用が促進される一方、教材や課題を格納するためのストレージ容量の増加という課題も生じている。

オンライン授業への移行に伴い、2019 年度までの利用と比較し、PDF や Powerpoint 等を利用した教材

のアップロードが増えたことにも起因するが、動画を利用した教材や、Zoom 等で実施した授業の録画を Echo360、Kaltura、Mediasite 等の動画配信システムにアップロードするのではなく、利便性の観点から LMS に直接アップロードされるケースが多く、教育機関で見受けられた。下図に 15,000 人+規模でのストレージの利用推移を示す。

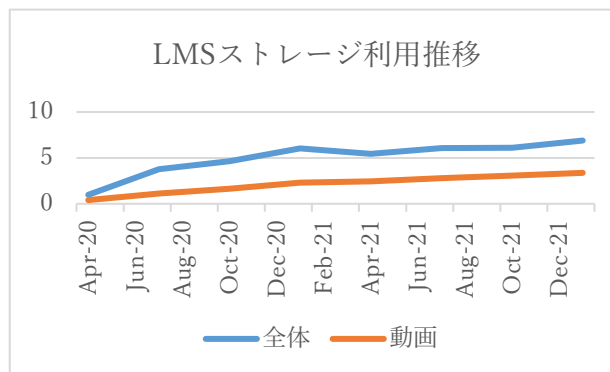


図 2 : LMS ストレージの利用推移
(ストレージ全体および動画の推移)

4. オンライン授業と学生エンゲージメント

近年、学生エンゲージメント（学生の関与）の重要性が叫ばれており、特にオンライン授業において学生のエンゲージメントをいかに確保するかは難しい課題のひとつである。

オンライン学習において学生エンゲージメントに影響を与える要因として、

- ソーシャルサポート
- オンラインコンテンツとアクティビティのデザイン
- 学生の自己効力感

の3つに Emergency remote learning during COVID-19 crisis: Students' engagement では言及している。



図3：Factors influencing students' engagement in online learning

当社が2021年9月にLINEリサーチを利用しオンライン授業における状況のアンケートを実施した際にも、グループ活動や他の学生との共同学習を望む声が多い結果となったが、これらの活動はソーシャルサポートや自己効力感を高める働きがあるものと考えられる。



図4：LINEリサーチ
オンラインでの学習における最も効果的と思うもの

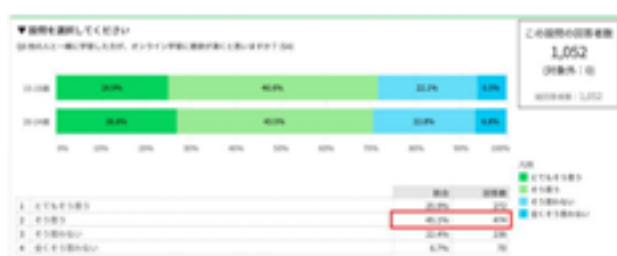


図5：LINEリサーチ
他の人と一緒に学習した方がオンラインに意欲が湧くか

5. おわりに

CLE (Collaboration and Learning Environment) という名で利用される LMS には、デジタルコンテンツを含む学習者のコミュニティを構築し、知識の共有、批判的思考の強化、コラボレーションを通じて学習をサポートする様々なツールが用意されています。

対面授業を主体とする学習においても、予習・復習での活用や、様々なレベルの学生に対応したコンテンツをご用意いただくことにより、学士力の向上が可能となります。

引き続き、CLE (Blackboard Learn)をご活用いただけます様、お願い申し上げます。

参考文献

- [1] The Difference Between Emergency Remote Teaching and Online Learning,
<https://er.educause.edu/articles/2020/3/the-difference-between-emergency-remote-teaching-and-online-learning>
- [2] Emergency remote learning during COVID-19 crisis: Students' engagement,
<https://link.springer.com/article/10.1007/s10639-021-10566-4>
- [3] 令和3年度後期の大学等における授業の実施方針等について、
https://www.mext.go.jp/content/20211118-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf

出典

- [1] (図3) Emergency remote learning during COVID-19 crisis: Students' engagement,
<https://link.springer.com/article/10.1007/s10639-021-10566-4>

コロナ禍に求められるシステムベンダの役割

SCSK 株式会社

産業事業グループ 産業ソリューション事業本部

産業ソリューション第一部 文教サービス課

鐘ヶ江 力

1. はじめに

2020年1月に最初の国内新型コロナ感染者が出た後に、全世界がコロナ禍に巻き込まれていくこととなった。

弊社では2020年2月21日に新型コロナウイルスの感染拡大に伴う対策についてニュースリリースを公開し、本格的な対応を開始した。グループ社員および当社グループで働くパートナーに対して、在宅勤務並びに時差出勤の指示、イベント・懇親会の制限、体調不良時の対応を実施することとなり、その後、リモート環境の拡充やオフィス出勤率の設定など感染状況に応じた施策を進めてきた。

弊社だけでなく多くのシステムベンダが対応を進め、コロナ禍をどのように乗り越えていくか様々な施策を打ち出している。

私が担当している文教ビジネスにおける対応では、従来からリモートからの業務遂行ができる環境を利用していたことから比較的スムーズに移行はできたが、顧客先での現地作業など調整が困難なケースも多く見受けられた。

メインとなる拠点が東京であったことから、地方へ出張して対応する際に懸念を示される、拒否されるなどの事例が発生した。

このような状況下で、クラウドサービスでの業務ツールやリモートコミュニケーションツールの導入が大きく増加し、時間や場所の制約を軽減できるITツールがコロナ禍の課題解決に寄与できることから、過去最高益を記録するベンダーも出てきている。

システムベンダとしてコロナ禍をとらえると、顧客におけるシステム導入の加速、コミュニケーションやサービス・サポート提供のリモート化・電子化の浸透、勤務形態の柔軟性の向上がプラス面、マイナス面に働く状況が生まれている。

このような状況下で、システムベンダとしてどのような対応を進めてきたか、今後どのような方向に進んでいくのか、自身が担当する高等教育機関に向けたサービス提供での事例を元に述べていきたい。

2. 顧客とのコミュニケーション

コロナ禍に入り、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が発出され、訪問での対応が厳しくなると多くのコミュニケーションがリモート会議へ移行していった。

対応する社員自体が在宅中心の勤務となったこともあり、コミュニケーションの中心がメール、チャット、Web会議といったものに一気にシフトしていった。

提案時の資料配布や契約などの事務手続きも、従来、紙媒体での対応が求められていたものが、メールによる電子ファイルでの対応となり、顧客と双方で効率化やコスト削減につながる結果となっている。

また、チャット、Web会議の利用により、打合せ予定の調整が容易になり、簡単な打合せならチャットを使うことでそのまま記録も残すことができ、Web会議なら録画をすることで簡単に記録と振り返りができるようになった。

ただ、相互の関係性の構築が十分でない場合、リモートでのコミュニケーションでは相手側の状況や反応が掴みにくく、ストレスを感じるケースも報告されている。

3. システム導入・サービス提供

コロナ禍におけるシステム導入・サービス提供においては、平常時は現地訪問によって実施してきたものの内、リモート化が可能なものはリモート対応に切り替えていくケースが出てきたが、リモート実施については、従来から採用していた方式でもあり、混乱なく移行ができています。

大学においてはオンライン講義が新型コロナ対策として実施されていくこととなったが、これが急速に教育への ICT 活用を後押しする結果となっている。

LMS を使った講義運営や Web 会議ツールや講義収録・配信システムを使った講義配信を教員が半ば強制的に使用することとなり、オンプレミスで提供されているサービスではシステムリソースの枯渇により、アクセスができなくなるといった障害も発生した。

また、Web 会議のツールについては教員の選択に任せており、学生が授業ごとに使用するツールを変えざるを得ない状況も確認された。

一方、このようなサービスをクラウドサービスで学内標準として提供していた大学では、教員の操作の習熟度の問題はあるにせよ、そういったシステムリソースに関するリスクはオンプレミスの場合よりも低く、継続的に利用ができていた。

弊社では、echo360 社が提供しているクラウド提供型講義収録・配信サービスを取り扱っており、大阪大学においても多くの授業で活用いただいている。

このクラウドサービスは、アジア・パシフィック地域で 2021 年は 79 万人が利用し、5,500 万回以上のビデオ再生、1,900 万時間に及ぶ視聴がなされている。

1 年間の稼働率は 100% であり、学内で運用することと比較するとシステム導入の容易さ、運用負担の軽減や継続的なサービス提供といった点でクラウドサービス利用のメリットが大きい。

クラウドサービスでは、トレンドに合わせた改修が継続的に追加されるのもメリットとして考えられる。先の echo360 社のクラウドサービスでは、Web 会議サービスの録画を取り込んで配信できる機能が追加され、2021 年は全体の 69% がそのような収録された動画の再生となっている。

2021 年に入り、教室での授業が再開され始めると、オンライン講義配信に使用していたツールを複数の教室へのライブ配信で使用し、密を避ける手段として活用する事例も出ており、活用の幅が広がっている。

弊社の教務システムを運用いただいている大学からは、オンライン講義向けの情報を掲載するためや諸手続の電子化の依頼も増加し、既存のシステムを拡張して活用する例も見られた。

シラバスの授業手法の記載欄を追加して記入を必須化する、オンライン講義の URL を一括で登録する機能を追加する等が事例として挙げられている。

また、これまで比較的回答率が低いと言われていた Web アンケートもコロナ禍で授業評価アンケートに使用したところ、6 割を超える回収率を記録した大学もでてきている。

さらに取り組みを進めて、授業期間内に複数回アンケートを実施し、受講している中で学生自身がアンケート回答に対するフィードバックを体験できるようにならないかという動きもある。

4. システムベンダに求められる役割

コロナ禍で進展した ICT 活用が今後どの程度定着し、どのように活用できるか、そのためのパートナーとしての役割が今後はシステムベンダに問われていくのではないかと考えている。

そのためには、単に顕在化している課題に対する解決のための提案だけではなく、ICT に精通しているシステムベンダの利点を生かして、リモートコミュニケーションが広く認知されている状況下で、広く ICT 活用の事例を収集し、今後起こりうる共通的な課題への早期対応といった提案も必要になる。

大学においては全学的な教学マネジメントによる教育改善やPDCA サイクルに基づいた内部質保証システムの構築などが課題として挙がってきているが、コロナ禍での ICT 活用により、データを統合・分析し、取り組みを加速させる機会が生まれていると感じている。

昨今は学修活動を記録するポートフォリオシステムの導入の問い合わせも増えており、単にデータを蓄積して整理、振り返りを行うだけでなく、どのようにデータを記録し、活用していくか、既存のシステムとの連携や役割分担を含めて設計を行う方向に進んでいる。

このような背景から、システムベンダとしては、1 つのツール・システムが使われる現場のことだけでなく、利用されることによって記録されるデータが教学マネジメントや内部質保証といった上位の施策において活用可能なトータルデザイン、ロードマップといった総合的な提案を求められていると考えている。

また、新たな導入による ICT 活用の推進だけでなく、費用対効果の向上や継続的な予算確保のためにも、既に導入済みのシステムやサービスを”より良く”活用するためのサポートの提供も重要である。

弊社では、これまでも現地でのサポートを主体として LMS やポートフォリオなどの ICT 活用の利用促進を提供していたが、コロナ禍による後押しもあり、こういった QA 以上の高度なサポートもリモート化を進めている。

リモート化することで、システムベンダ側ではバ

ックアップメンバのアサインや障害時の有識者による支援が受けやすくなるメリットもある。

対面で無いことに対する懸念を示されるケースもあるが、チャットなどで、複数名で参加し、インスタントメッセージを介して、随時サポートを提供するような手法で解消した事例もあり、コミュニケーションツールの活用ノウハウが蓄積されつつある。

現状でも今後の新型コロナの感染状況は予断を許さないが、アフターコロナを見据えて、障害時の回避策としての ICT 活用ではなく、大学におけるサービス提供においてコミュニケーションや授業設計などに日常的に組み込まれたものとして位置づけられるようにすべきと考えている。

ICT を教育改善や事務の効率化・負荷の軽減として継続的に活用すること自体が、有事の際の備えにもなる。

システムベンダの役割はシステムだけにとどまらず、システムを使ったサービスをより良く運営するためのサポートまで拡張すべきである。

5. まとめ

コロナ禍という状況は、我々の生活に多大な影響を与えているが、ICT 活用の浸透という観点ではプラスに働く面も出てきている。

大学における ICT 活用が進展することで、教育を含めた様々なサービスのデータが電子化され、可視化・分析といったデータを元にした改善サイクルの実現が可能になる。

そのような機会を目の前にして、システムベンダとしては、ICT 活用の定着と進展を狙った中長期的な視点での提案が求められると考えている。

ICT 活用を継続的に進展させることで、コロナ禍で平常時と同様の教育サービスを受けることを制限されている学生の方に対して、学びの機会を継続できるだけでなく、ポストコロナを見据えても、学生の方に様々な状況において学び方の選択肢を増やす

ことにつながるのではないだろうか。

また、ICT 活用によって、学生の一つ一つの学習の記録が電子化され、統合・分析されることで、大学が提供するサービスの改善にも役立てることができないかと考えている。

単に電子化、自動化、効率化といった観点だけでなく、新たなサービスや価値を共創していくパートナーとしてのシステムベンダでありたい。

以上

◇ 教育用計算機システム関係

(情報教育システム)

- ・ 2020 年度情報教育システム利用状況（前年度比較） ----- 15
- ・ 情報教育関連の講習会・説明会・見学会等の開催報告 ----- 21

(CALL システム)

- ・ 2020 年度 CALL システム利用状況（前年度比較） ----- 23
- ・ CALL 関連の講習会・説明会・見学会等の開催報告 ----- 29

(箕面教育システム)

- ・ 2020 年度箕面教育システム利用状況（前年度比較） ----- 31

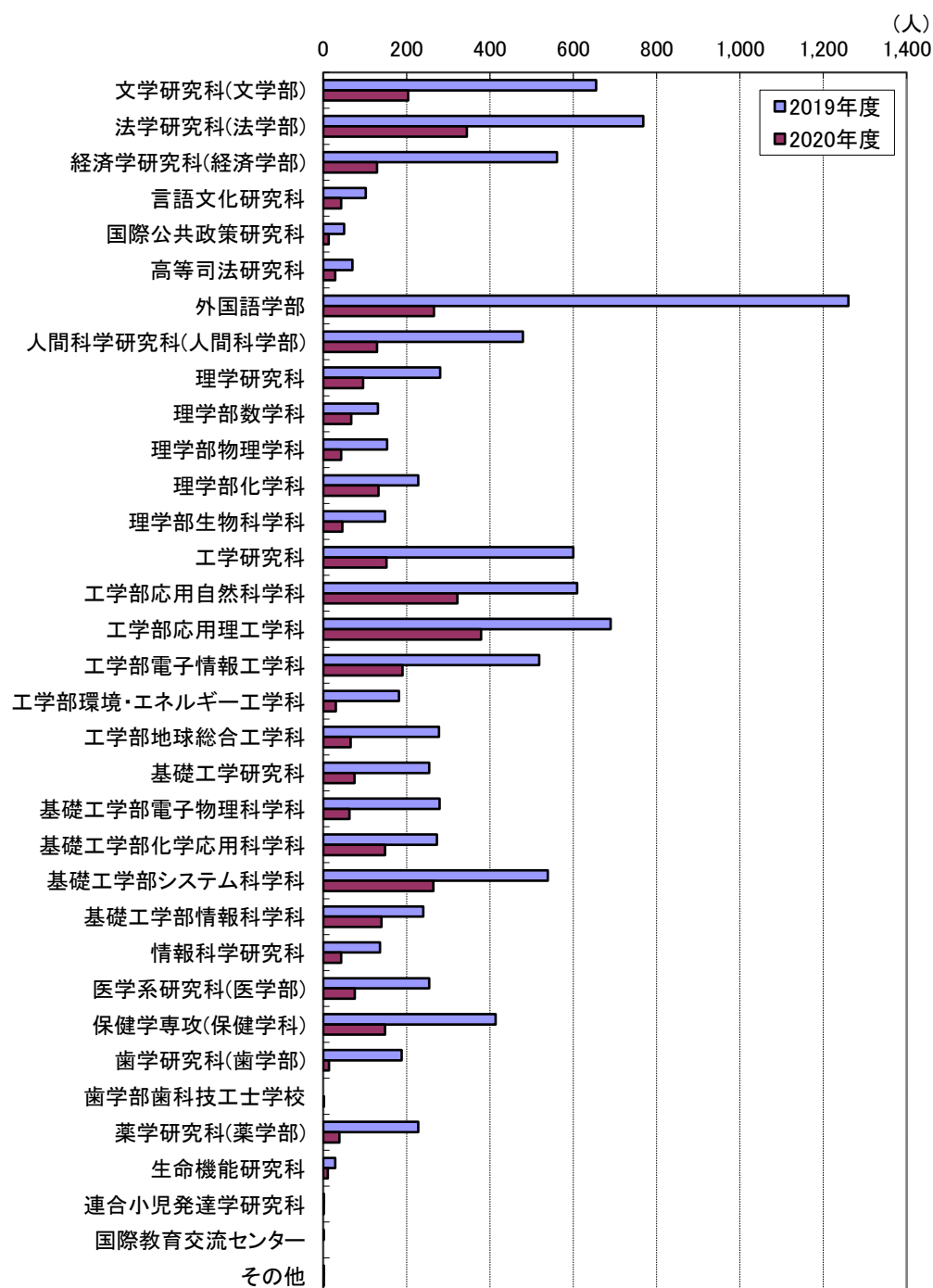
◇ 2020 年度会議関係等日誌

- ・ 会議関係・大規模計算機システム利用講習会・センター来訪者 ----- 35

2020 年度情報教育システム利用状況 (前年度比較)

1. 所属部局別実利用者数

実利用者数 2019 年度 10,602 人
2020 年度 3,707 人



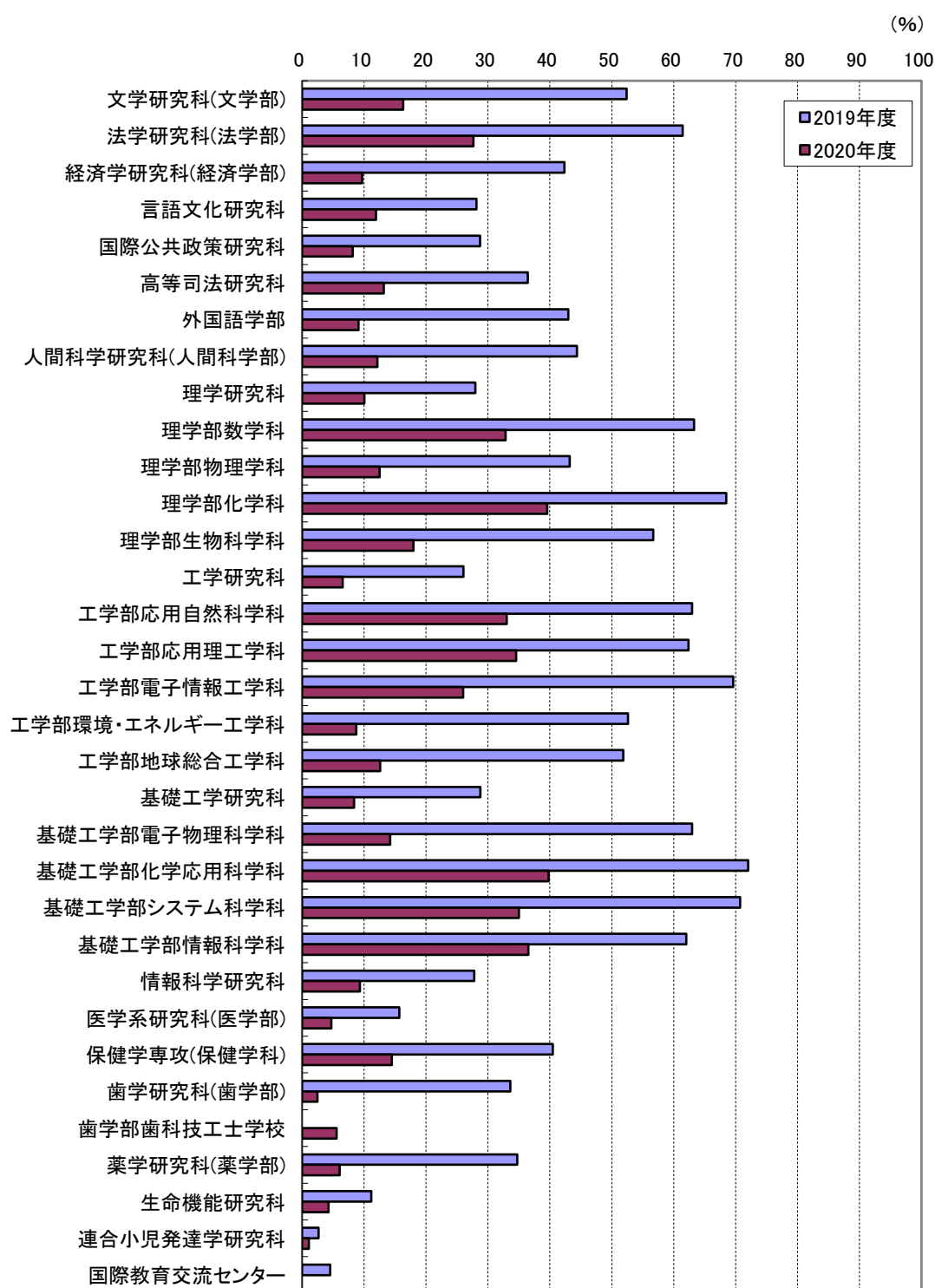
注 1 : 学生の利用についてのみ集計しています。

注 2 : 理学研究科、工学研究科、基礎工学研究科については、学部学生を学科毎に集計しています。

注 3 : 医学系研究科(医学部)については、保健学専攻(保健学科)を別に集計しています。

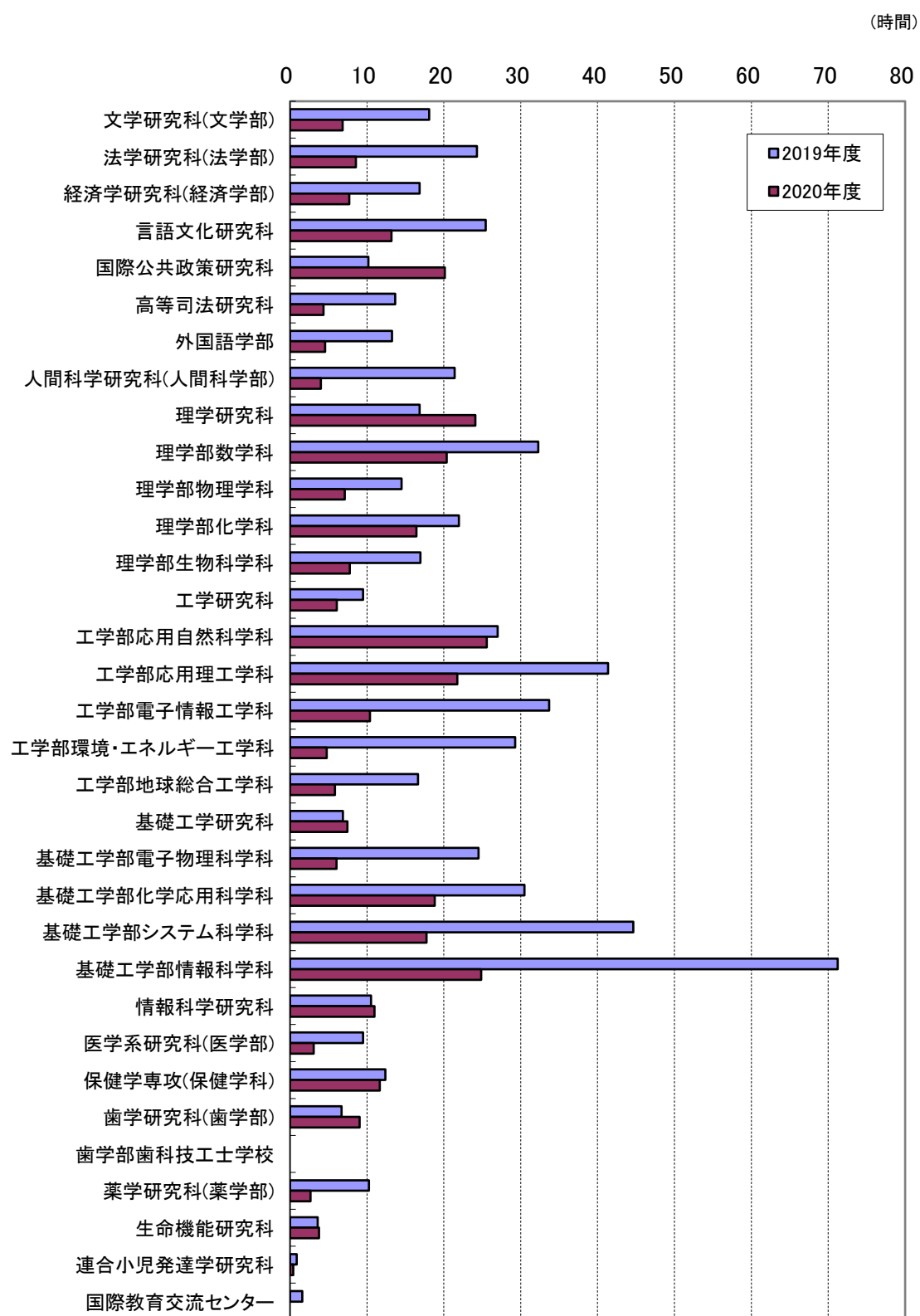
注 4 : 実利用者数には、BYOD(Bring Your Own Device)の実利用者数 (2019 年度 2,076 名、2020 年度 1,981 名) を含みます。

2. 所属部局別在籍者に対する実利用者の割合

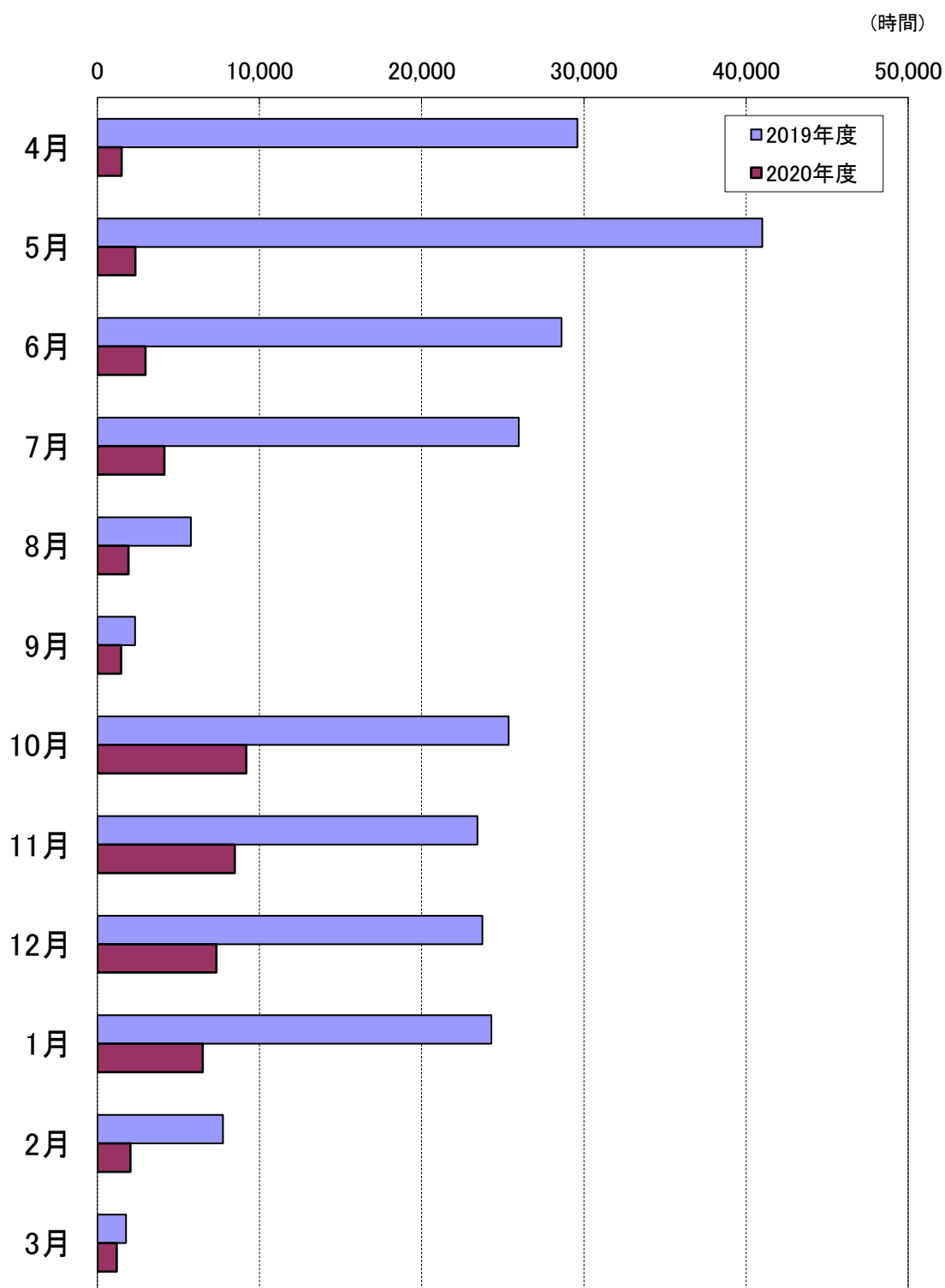


注：学生数については、5月1日現在の在籍者数を母数にしています。

3. 所属部局別実利用者 1 人当たりの年間平均利用時間



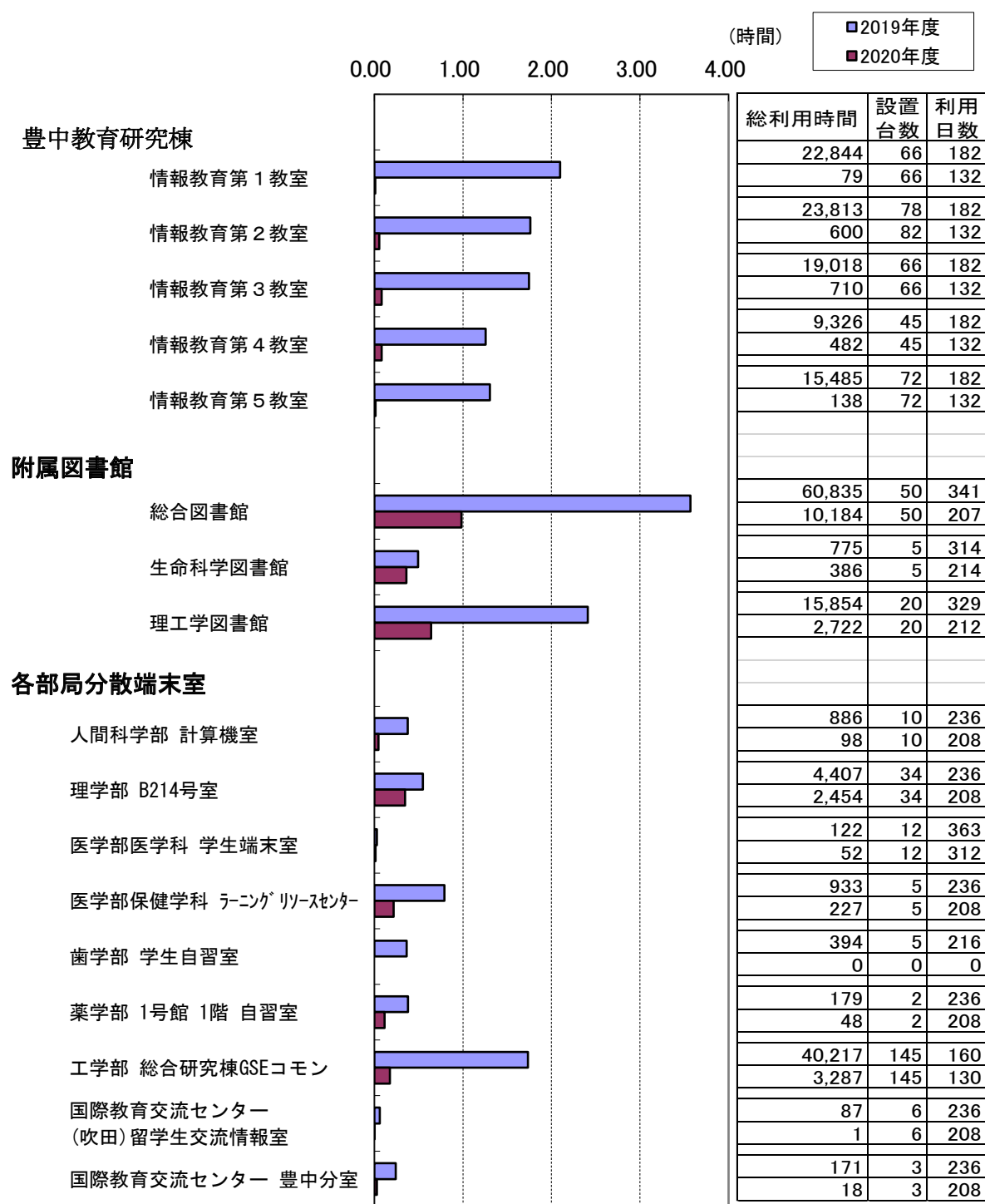
4. 実利用者総利用時間(月 毎)



注 1 : 年間総利用時間は、239,667 時間(2019 年度)、49,062 時間(2020 年度)です。

注 2 : 総利用時間には、BYOD(Bring Your Own Device)の利用時間 (2019 年度 24,308 時間、2020 年度 27,569 時間) を含みます。

5. 教室・分散端末室別 1 日 1 台当たりの平均利用時間

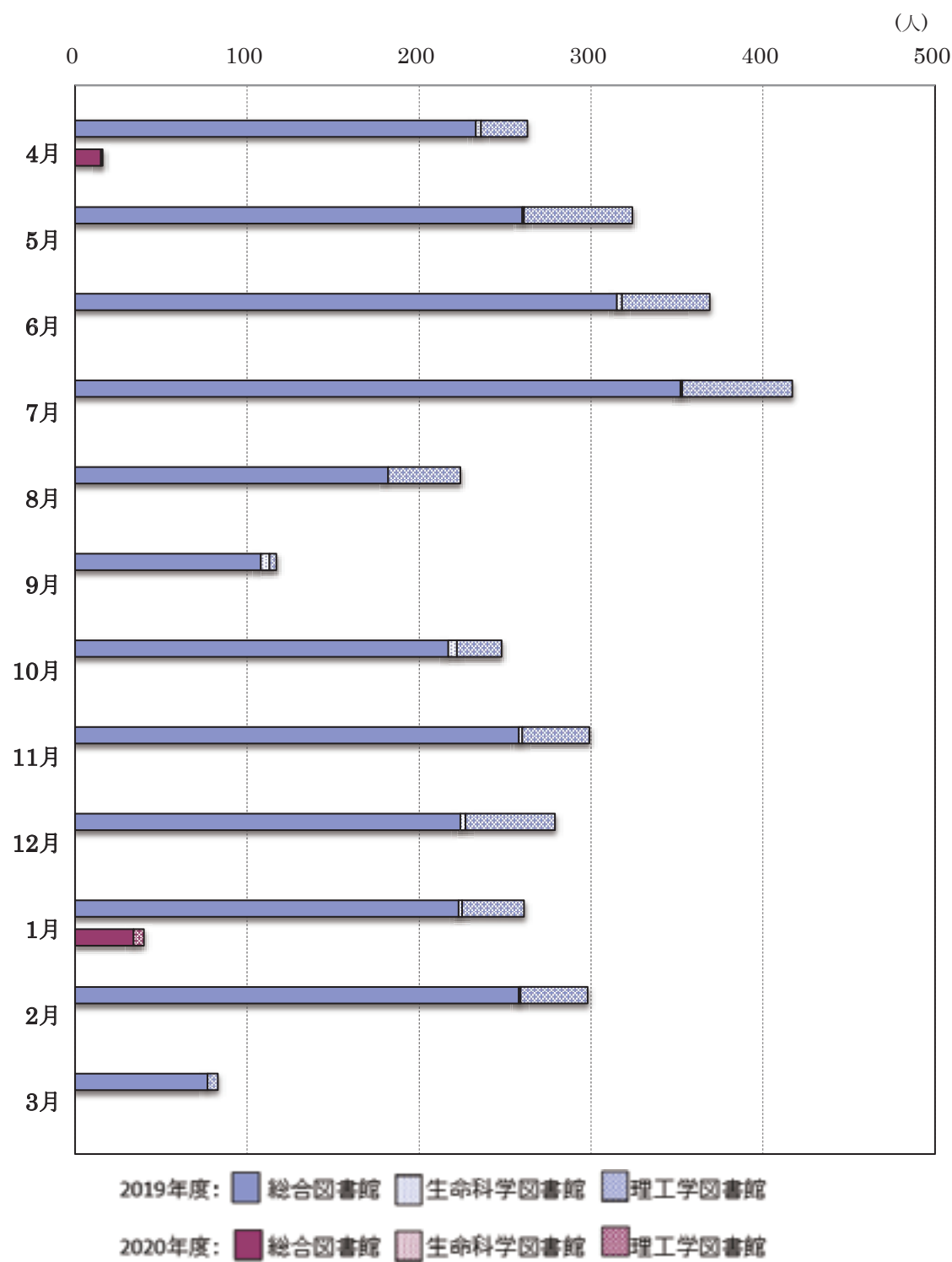


注1：総利用時間を各部屋の設置台数と利用日数で割っています。

注2：大阪大学の活動基準により学生の登校が禁止された4月8日～5月27日の期間は利用日数から除いています。

注3：歯学部学生自習室は2019年度をもってサービスを終了しました。

6. 月別附属図書館の休日（土・日）実利用者数



【参考】附属図書館の休日（土・日）のサービス日数

	総合図書館	生命科学図書館	理工学図書館
2019 年度	99 日	78 日	81 日
2020 年度	6 日	12 日	5 日

情報教育関連の講習会・説明会・見学会等の開催報告

大阪大学CLE講習会（応用編）

日 時：2020年9月9日（水）15:00～16:50
場 所：Blackboard Collaborate Ultraによるオンライン開催
参加者数：48名
内 容：授業支援システムCLEの応用機能であるグループ学習、ディスカッションボード、e-Portfolio、ルーブリックなどの機能を紹介

メディア授業講習会（リアルタイムQ&Aセミナー）

日 時：2020年9月14日（月）13:00～14:00
場 所：ハイブリット開催（豊中教育研究棟 2F 情報教育第2教室、Blackboard Collaborate Ultra）
参加者数：12名
内 容：メディア授業で活用する各種授業支援システムに関するQ&Aセミナー

Maple 講習会

日 時：2020年10月14日（水）9:00～12:00
場 所：Blackboard Collaborate Ultraによるオンライン開催
参加者数：9名
内 容：Mapleの基本操作、基本数学、線形代数、微積分・積分変換、微分方程式、外部データの読み込みとカーブフィッシング等

Mathematica 講習会

日 時：2020年10月14日（水）13:00～14:30
場 所：Blackboard Collaborate Ultraによるオンライン開催
参加者数：33名
内 容：導入、データサイエンス、数式処理、カーブフィッシング、画像処理、機械学習

第15回女子中高生のための関西科学塾

日 時：2020年11月8日（日）
場 所：Zoomによるオンライン開催
参加者数：9名
内 容：プログラミング言語Pythonによる手書き文字認識を題材とした人工知能の仕組みについての体験学習

オンデマンド型CLE講習会（入門編）

日 時：通年
参加者数：12名
内 容：授業支援システムCLEの基本操作である教材配布、レポート提出、アンケート、小テストの作成方法を紹介

オンデマンド型CLE講習会（応用編）

日 時：通年
参加者数：8名
内 容：授業支援システムCLEの応用機能であるグループ学習、ディスカッションボード、e-Portfolio、ルーブリックなどの機能を紹介

オンデマンド型メディア授業講習会

日 時：通年
参加者数：37名
内 容：メディア授業のコース作成方法の修得を目的に、授業支援システムCLEおよび各種システム（Echo, Blackboard Collaborate Ultra, Zoom等）の活用方法を紹介

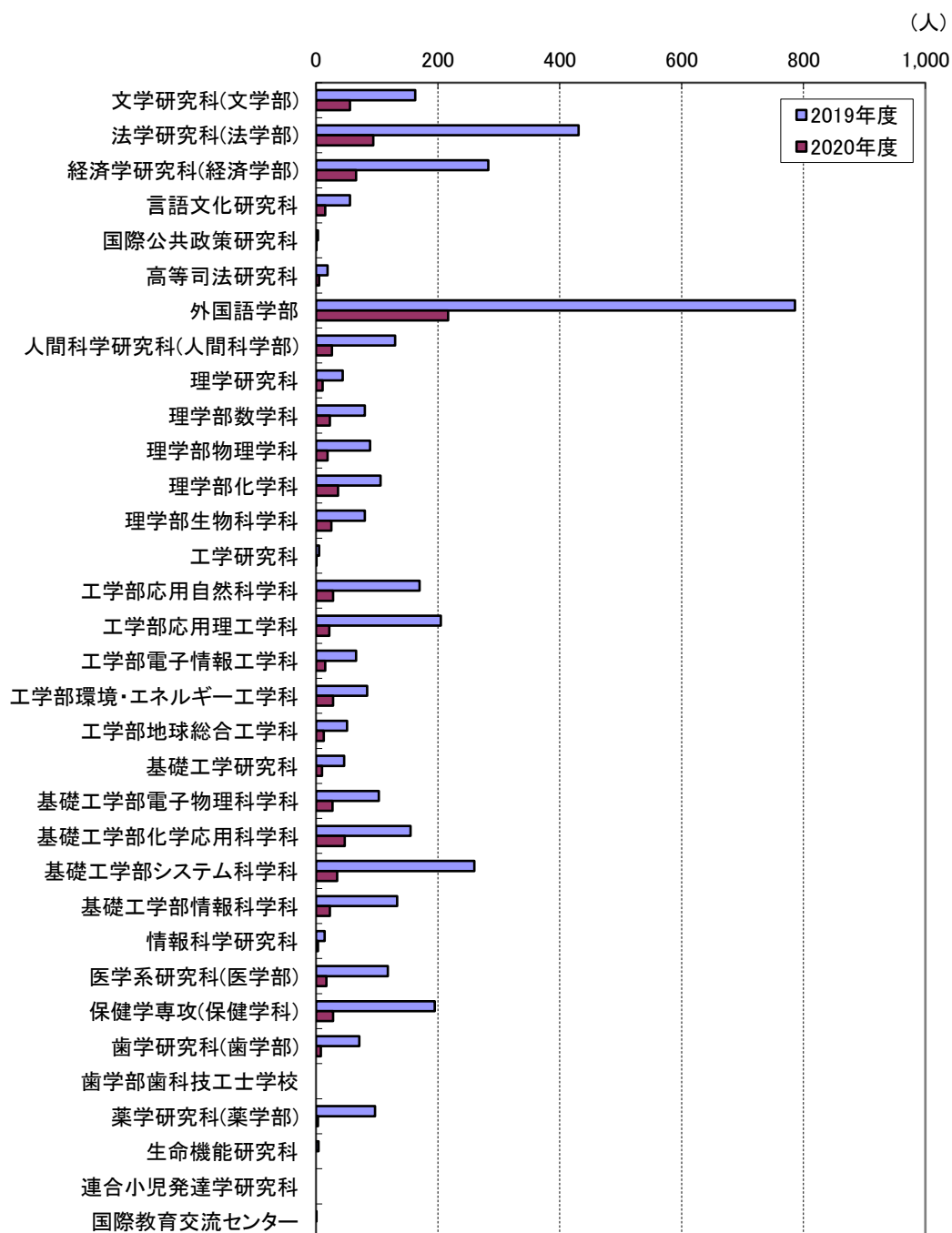
見学対応

学 校 名：大阪府立高津高等学校
日 時：2020年11月9日（月）14:30～16:30
場 所：豊中教育研究棟 5F 竹村研究室
参加者数：10名
内 容：施設見学等

2020 年度 C A L L システム利用状況 (前年度比較)

1. 所属部局別実利用者数

実利用者数 2019 年度 4,048 人
2020 年度 902 人

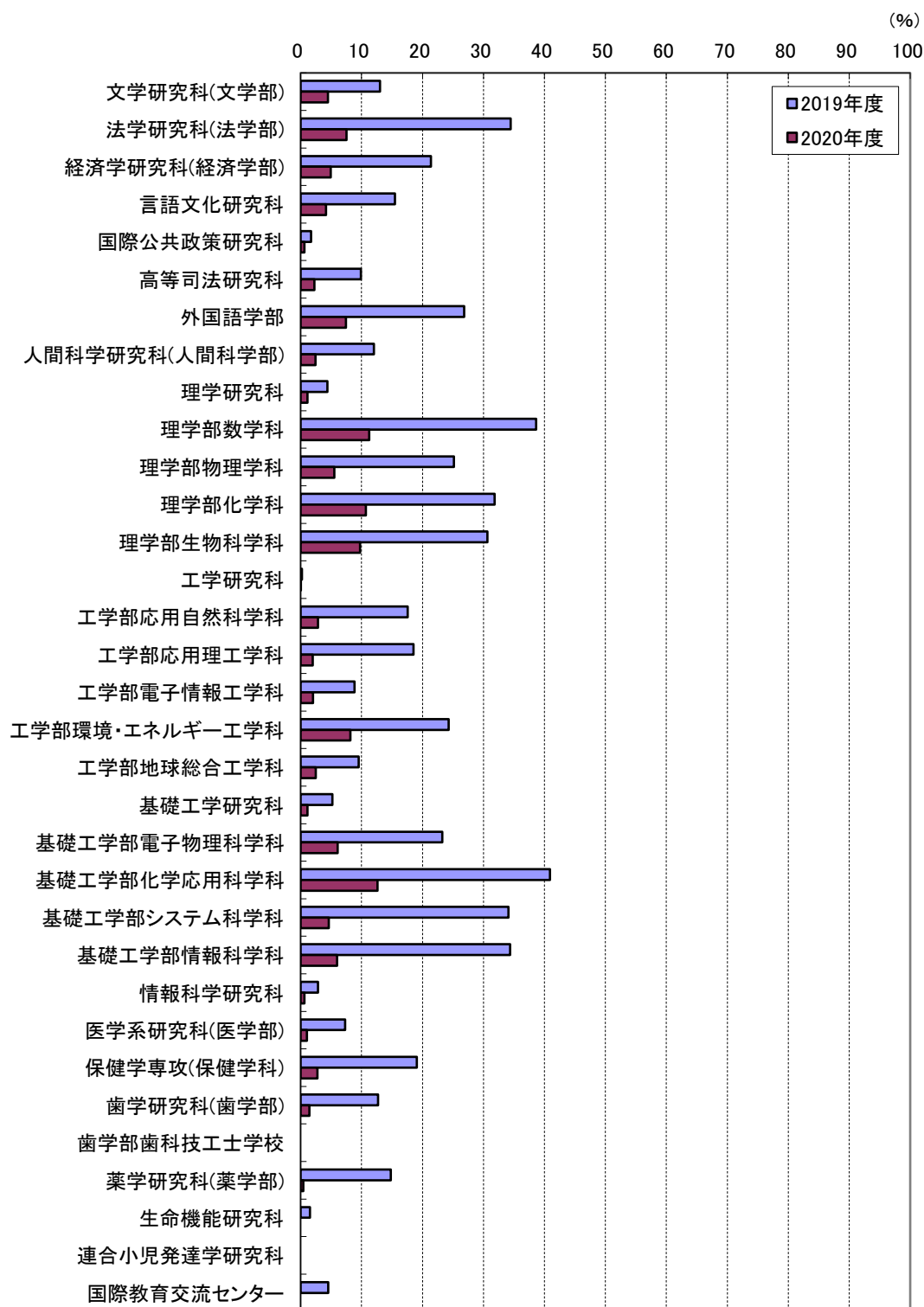


注 1 : 学生の利用についてのみ集計しています。

注 2 : 理学研究科、工学研究科、基礎工学研究科については、学部学生を学科毎に集計しています。

注 3 : 医学系研究科(医学部)については、保健学専攻(保健学科)を別に集計しています。

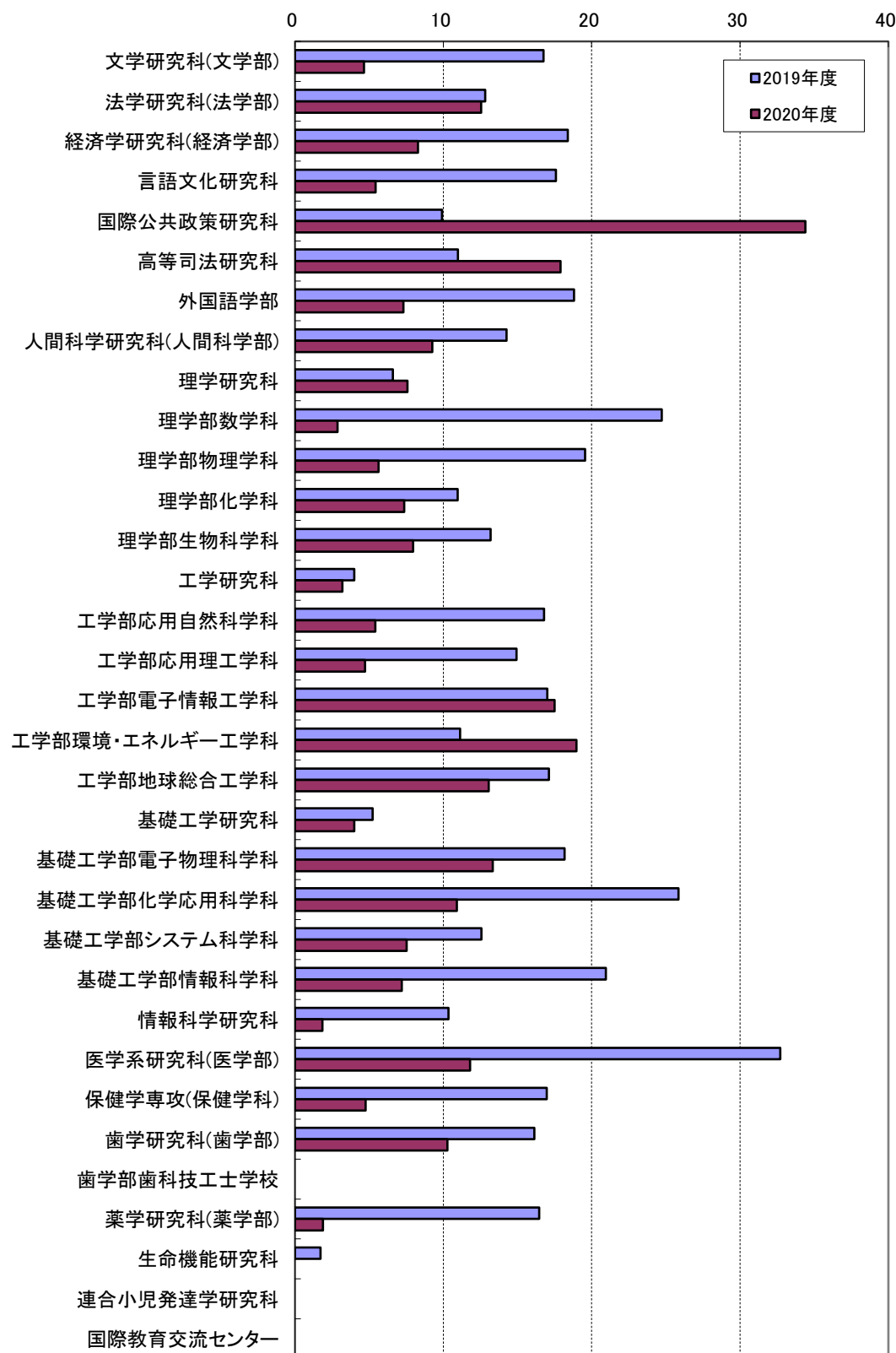
2. 所属部局別在籍者に対する実利用者の割合



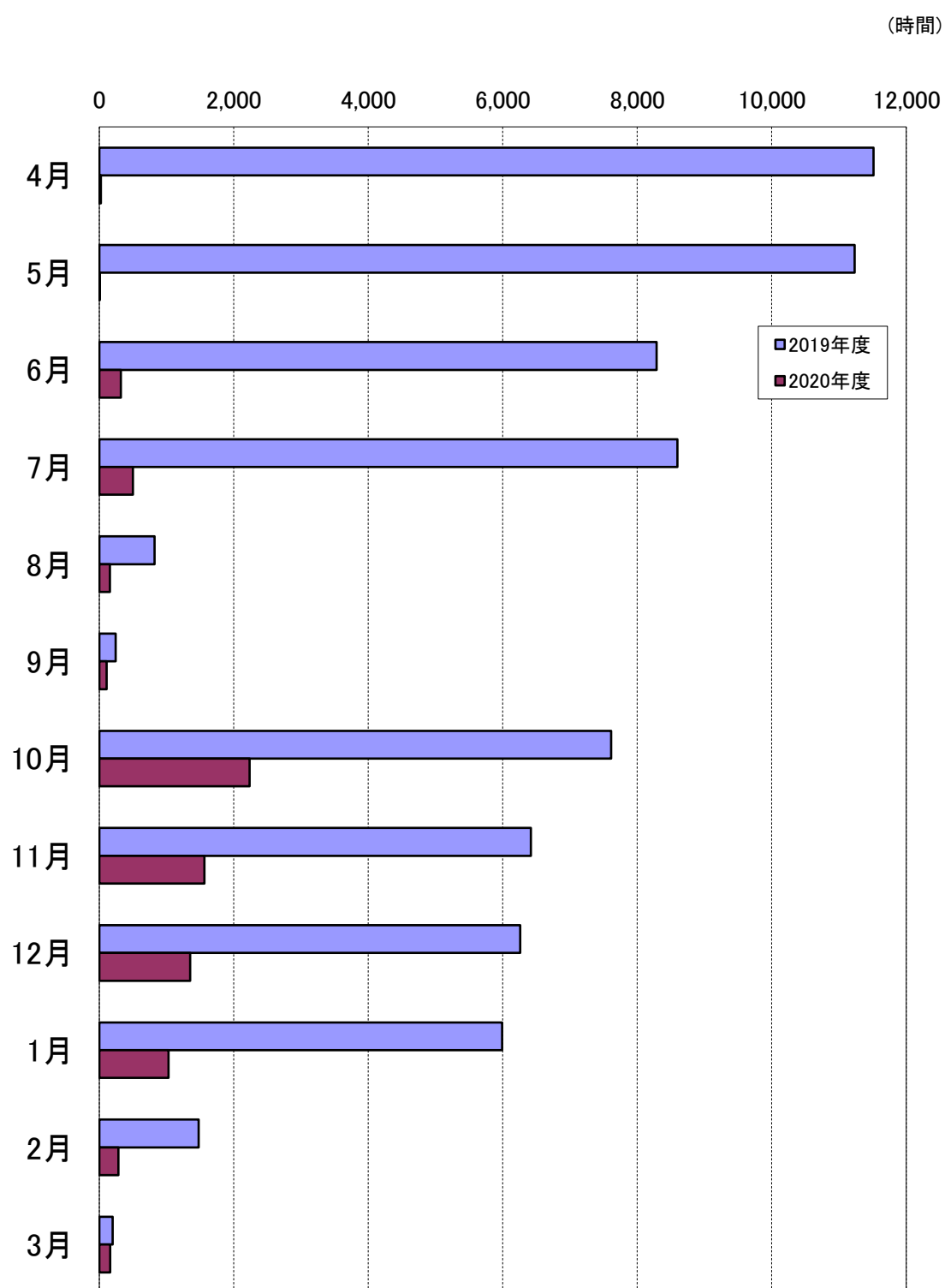
注：学生数については、5月1日現在の在籍者数を母数にしています。

3. 所属部局別実利用者 1 人当たりの年間平均利用時間

(時間)

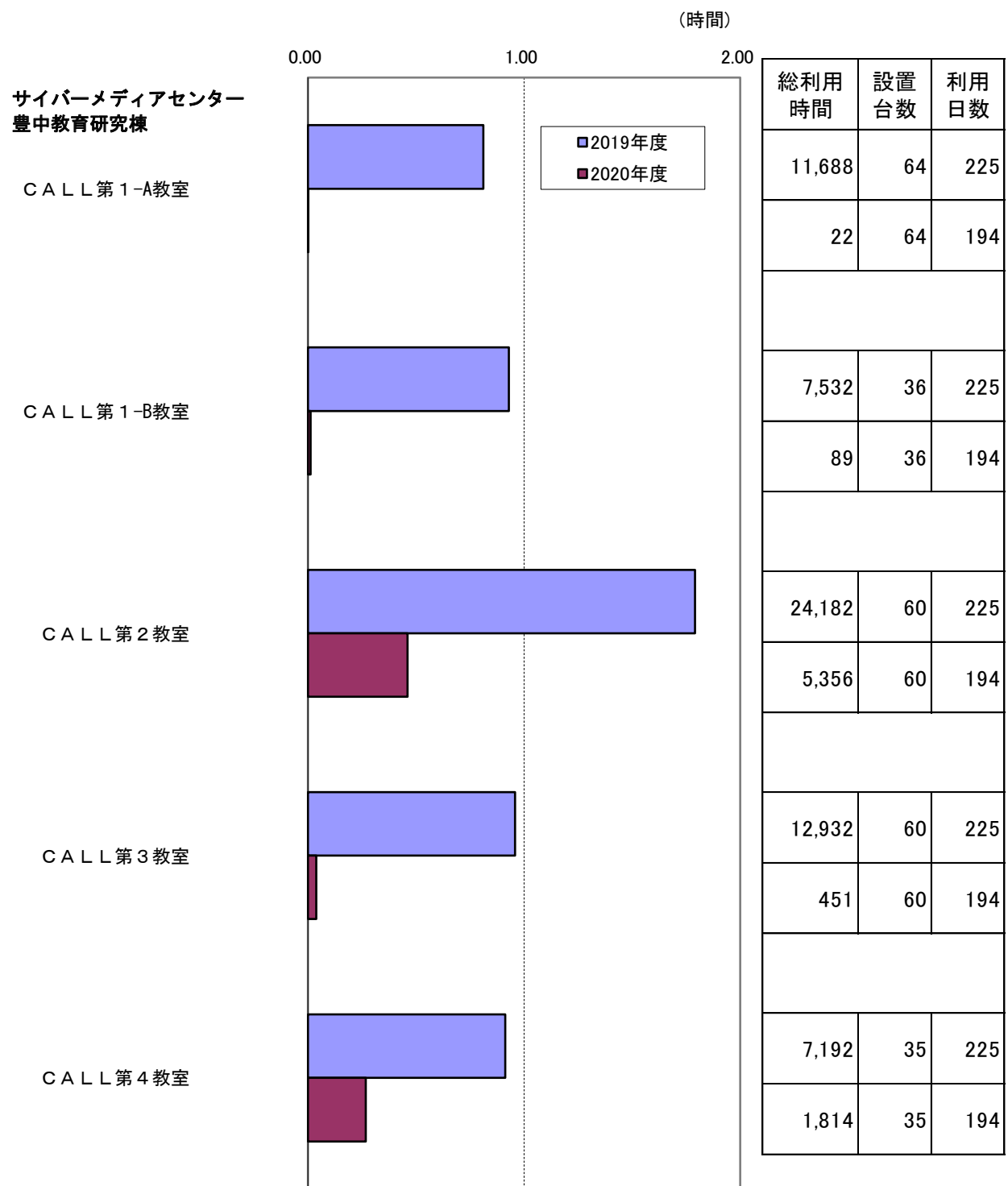


4. 実利用者総利用時間(月 毎)



注：年間総利用時間は、68,650 時間(2019 年度)、7,732 時間(2020 年度)です。

5. 教室・分散端末室別 1 日 1 台当たりの平均利用時間



注1：総利用時間を各部屋の設置台数と利用日数で割っています。

注2：大阪大学の活動基準により学生の登校が禁止された4月8日～5月27日の期間は利用日数から除いています。

CALL関連の講習会・説明会・見学会等の開催報告

CALL 講習会(前期)

日 時: 2020 年 3 月 27 日(金) 13:00～14:00

場 所: 豊中教育研究棟 4F CALL 第 2 教室

参加者数: 1 名

内 容: CALL システムの説明・授業支援システム説明・CALL ソフト体験他

大阪大学の市民講座 2020 Online!～複言語学習のススメ～

日 時: 2020 年 9 月 19 日(土)、10 月 18 日(日)、11 月 8 日(日) 13:00～15:30

場 所: Zoom によるオンライン講座

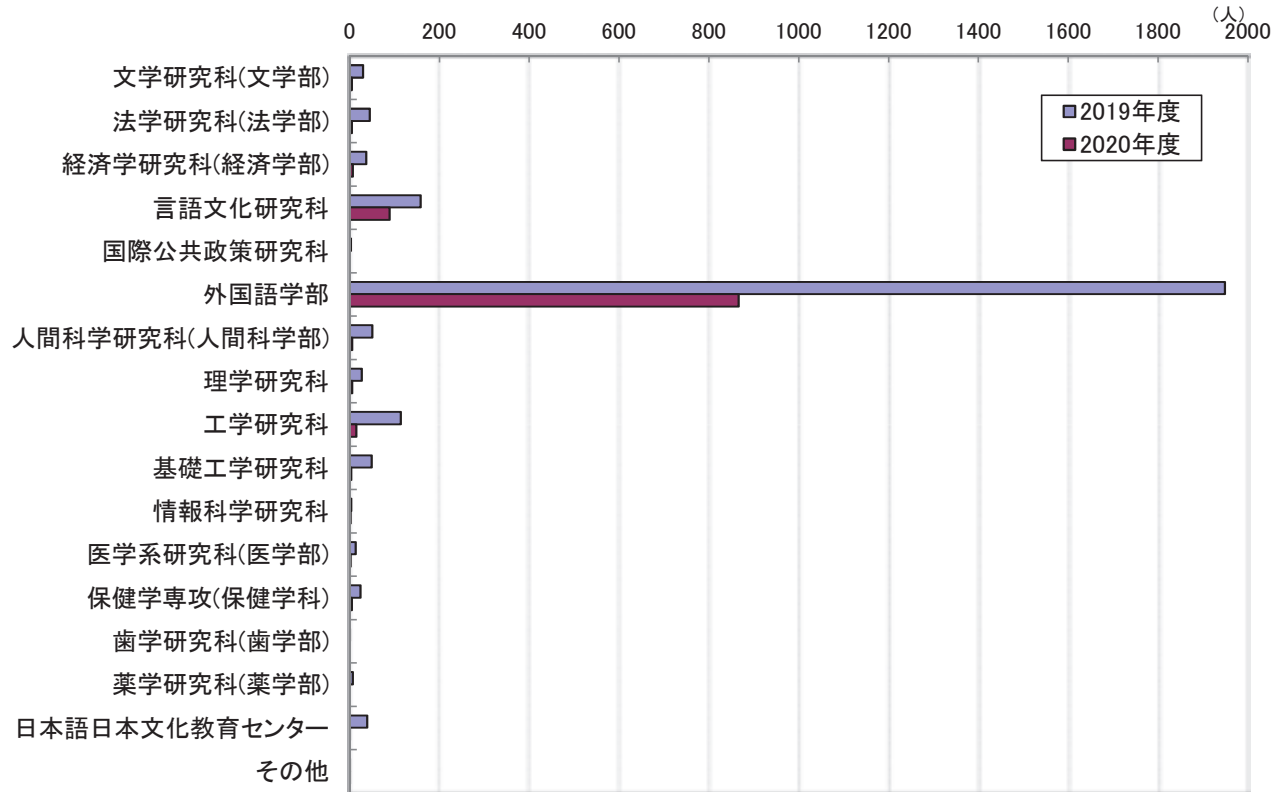
参加者数: 100 名

内 容: オンライン講習＋自宅でのビデオ学習などによって複数の言語で自己紹介などの表現を学ぶ

2020年度箕面教育システム利用状況（前年度比較）

1. 所属部局別実利用者数

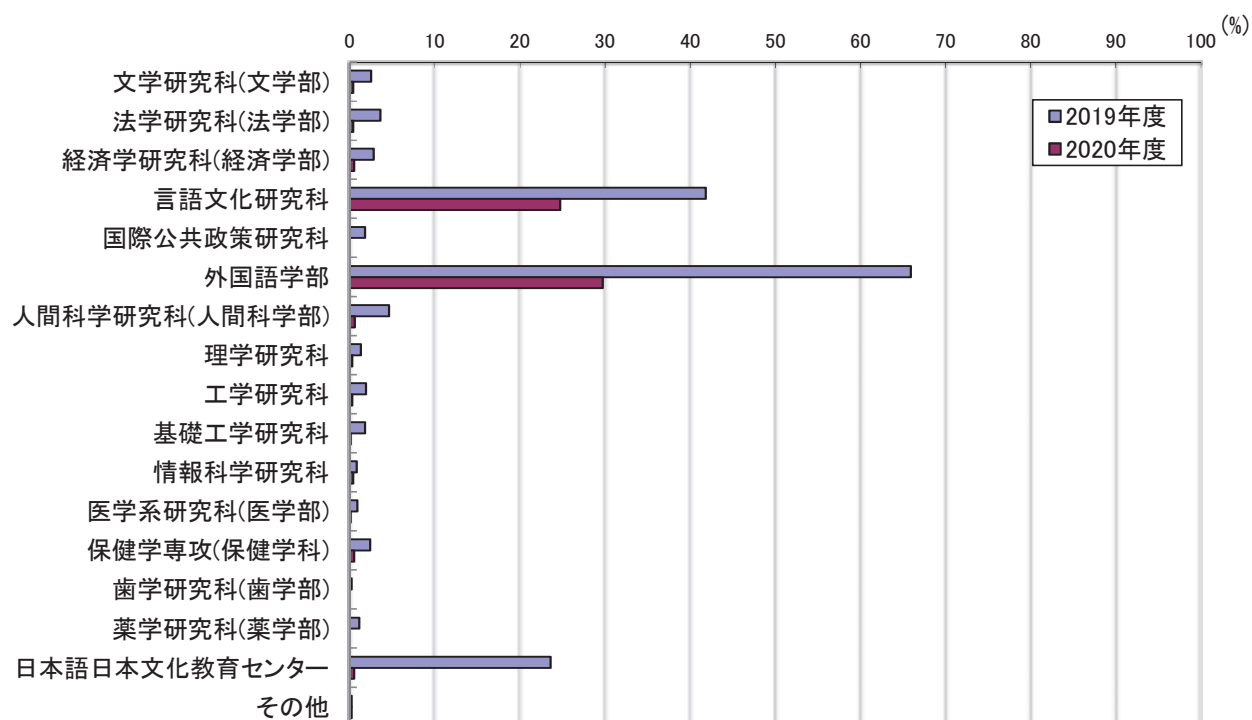
実利用者数 2019年度 2,553人
2020年度 1,014人



注1：学生の利用についてのみ集計しています。

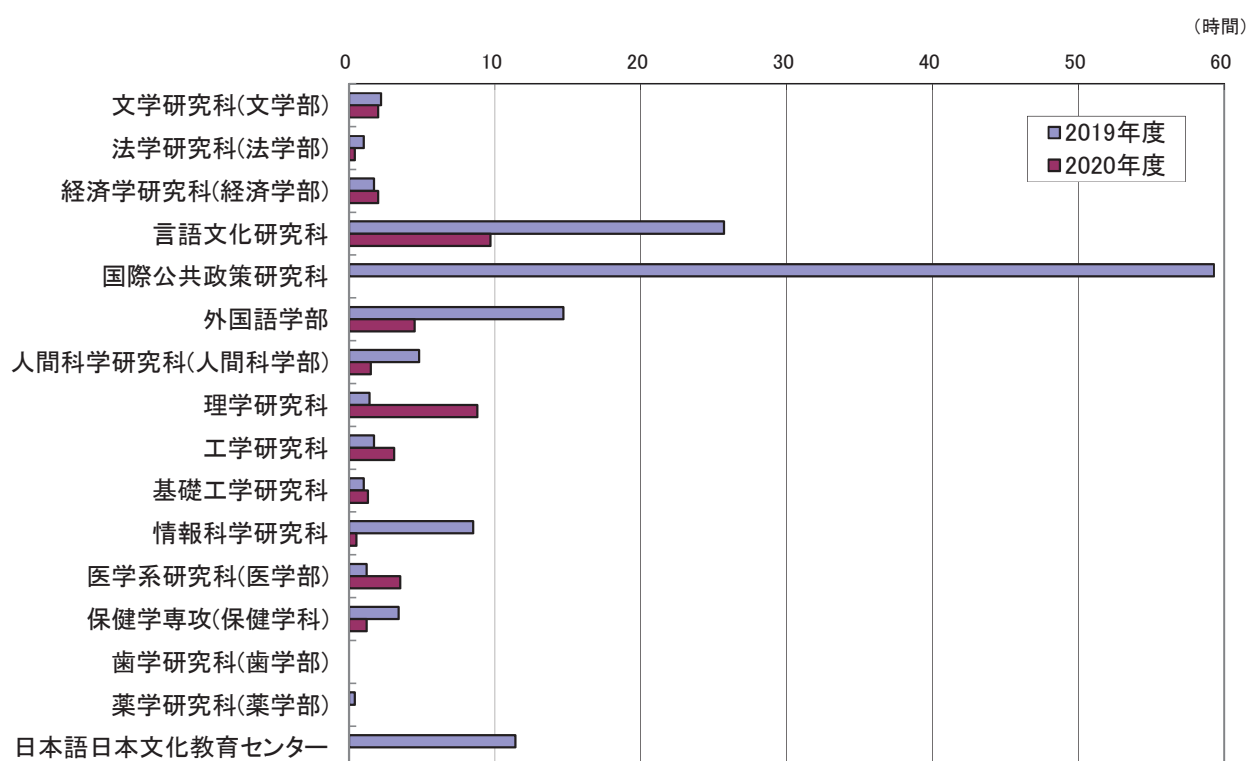
注2：医学系研究科（医学部）については、保健学専攻（保健学科）を別に集計しています。

2. 所属部局別在籍者に対する実利用者の割合

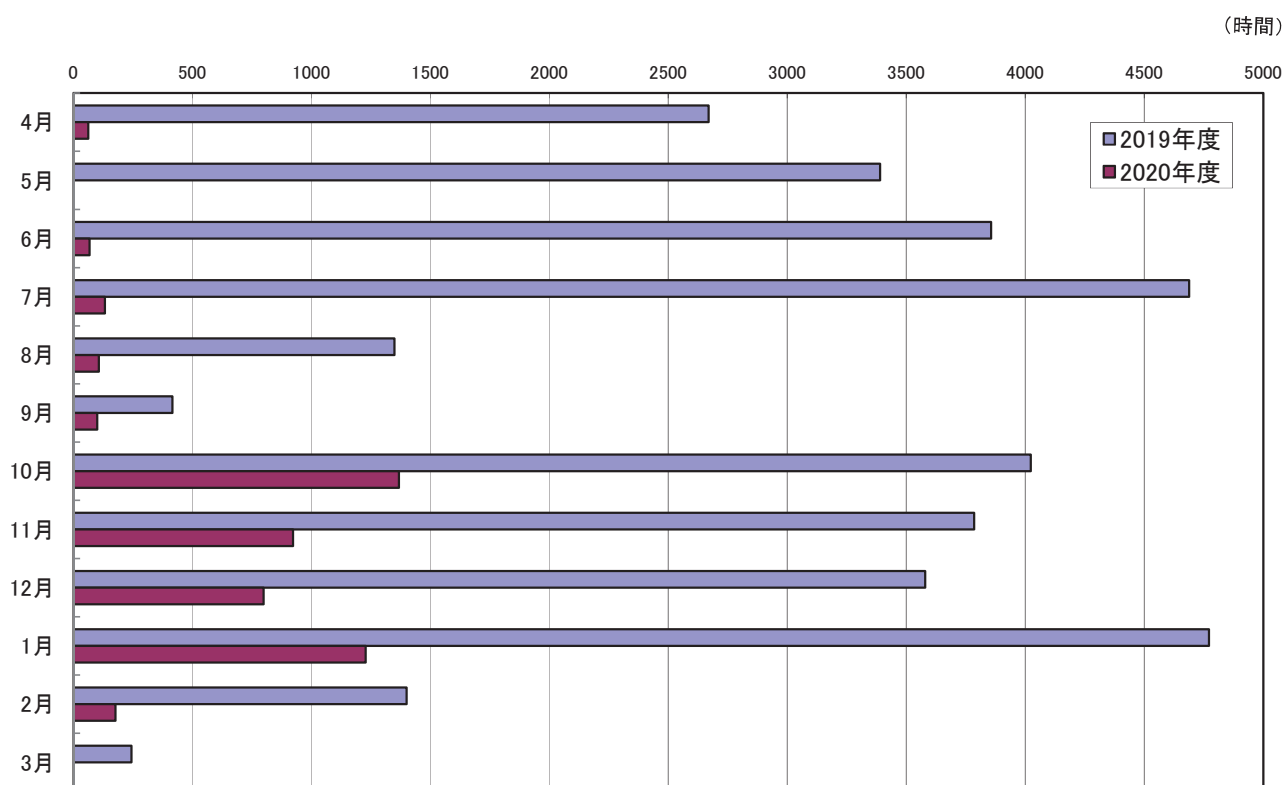


注：学生数については、5月1日の在籍者数を母数にしています。

3. 所属部局別実利用者 1 人あたりの年間平均利用時間

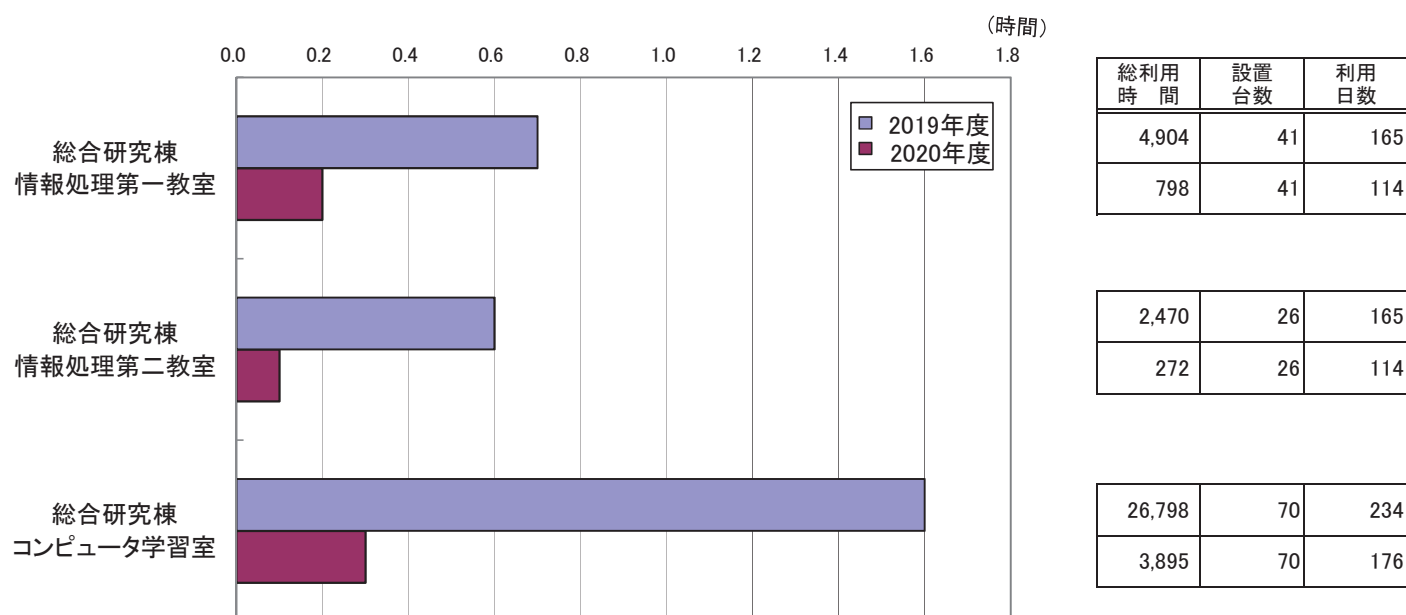


4. 月別実利用者総利用時間



注：年間総利用時間は、20,590時間（2019年度）、34,168時間（2020年度）です。

5. 教室別1日1台あたりの平均利用時間



注1：総利用時間を各教室の設置台数と利用日数で割っています。

注2：大阪大学の活動基準により学生の登校が禁止されていた4月8日～5月27日の期間は利用日数から除いています。

2020年度会議関係等日誌

会議関係

4月23日	定例教授会
5月28日	定例教授会
5月29日	第35回全国共同利用情報基盤センター長会議
6月25日	定例教授会
7月9日	第32回学際大規模情報基盤共同利用・共同研究拠点運営委員会
7月16日	定例教授会
9月17日	第14回クラウドコンピューティング研究会
9月17日	第31回認証研究会
9月18日	第83回コンピュータ・ネットワーク研究会
9月24日	定例教授会
10月22日	定例教授会
10月29日	第36回全国共同利用情報基盤センター長会議
10月29日	第33回学際大規模情報基盤共同利用・共同研究拠点運営委員会
11月26日	定例教授会
12月4日	令和2年度 国立大学共同利用・共同研究拠点 協議会総会
12月24日	定例教授会 第35回サイバーメディアセンター全国共同 利用 運営委員会
1月28日	定例教授会
2月8日	第34回学際大規模情報基盤共同利用・共同研究拠点運営委員会
2月25日	定例教授会
3月25日	定例教授会

大規模計算機システム利用講習会

6月22日	スパコンに通じる並列プログラミングの基礎(87名)
6月26日	スーパーコンピュータ概要とスーパーコンピュータ利用入門(27名)
6月29日	SX-ACE 高速化技法の基礎(13名)
6月30日	並列コンピュータ高速化技法の基礎(20名)
7月3日	並列プログラミング入門(MPI)(15名)
9月2日	スパコンに通じる並列プログラミングの基礎(38名)
9月3日	スパコン利用説明会(18名)
9月10日	スパコン利用入門(17名)
9月16日	SX-ACE 高速化技法の基礎(10名)
9月17日	並列コンピュータ高速化技法の基礎(7名)
9月24日	SX-ACE 並列プログラミング入門(MPI)(9名)
9月30日	OpenMP入門(10名)
10月28日	AVS可視化処理入門(6名)
10月29日	AVS可視化処理応用・特別相談会(3名)

センター来訪者

(豊中教育研究棟)

11月9日 大阪府立高津高等学校

利 用 案 内

◇ 教育用計算機システムの利用案内等

・ 教育用計算機システムの利用案内	39
・ 2021 年度情報教育教室使用計画表	40
・ 2021 年度 CALL 教室使用計画表	44
・ 情報教育システム 分散配置端末部局別責任者名簿	47
・ 教室・端末配置図	48

◇ 規程集

・ 大阪大学サイバーメディアセンター教育用計算機システム利用規程	50
・ 教育用計算機システム、学生用電子メールシステム利用者ガイドライン	50
・ 大阪大学総合情報通信システム利用者ガイドライン	53

教育用計算機システムの利用案内

1. 教育用計算機システムの利用について

1) 授業で教室を利用する

豊中教育研究棟の各教室を本学各部局の授業のために利用することができます。教室利用申請書はサイバーメディアセンターのホームページからダウンロードしてお使い願います。

2) 教育・研究で利用する

サイバーメディアセンターで行われる授業の利用に支障のない範囲内において、教職員の方が教育・研究のために豊中教育研究棟の各教室を利用することが出来ます。但し、センター長が適当と認めた場合に限りです。

3) 学生個人の利用

豊中教育研究棟の各教室及び箕面キャンパス外国学研究講義棟のクリエイティブワークショップ1は本学の学生であれば、自習学習に利用することができます。

2. 開館時間

1) 教室利用時間

地区	建 物 名	教 室 名	利用時間(平日のみ)	
			授業開講期間	授業休業期間
豊中	サイバーメディアセンター 豊中教育研究棟 1F～4F	情報教育第1～5教室	8時40分～21時30分	8時40分～17時
		CALL第1～4教室		
箕面	外国学研究講義棟 4F	クリエイティブワークショップ1	9時40分～20時40分	9時40分～17時

2) 事務室窓口

地区	建 物 名	事務担当	受付時間(平日のみ)	
			午 前	午 後
豊中	サイバーメディアセンター豊中教育研究棟 1F	情報推進部	8時40分～11時45分	12時45分～17時
箕面	外国学研究講義棟 4F	情報基盤課	9時40分～11時45分	12時45分～17時

休館等の詳しい日程は館内の掲示板やホームページでお知らせします。

サイバーメディアセンター (<http://www.cmc.osaka-u.ac.jp/>)

教育用計算機システム (<http://www.cmc.osaka-u.ac.jp/edu/>)

2021年度春学期情報教育教室使用計画表

時 限	教 室	月	火	水	木	金
1 時 限	第1	基(シ) 2年 コンピュータ工学基礎演習	文 1年 情報社会基礎	経 1年 情報社会基礎	薬 1年 情報科学基礎	
	第2		文 1年 情報社会基礎	経 1年 情報社会基礎	薬 1年 情報科学基礎	
	第3		文 1年 情報社会基礎	経 1年 情報社会基礎		
	第4		文 1年 情報社会基礎	経 1年 情報社会基礎		
	第5			基(システム) 2年 コンピュータ基礎演習		
2 時 限	第1	人 1年 情報社会基礎	理(生物) 3年 現代ゲノム研究概説	工(電) 1年 情報科学基礎C		
	第2	人 1年 情報社会基礎		工(電) 1年 情報科学基礎C		
	第3	人 1年 情報社会基礎		工(電) 1年 情報科学基礎C		
	第4	理(数学) 3年 実験数学3		工(電) 1年 情報科学基礎C	基(情報) 4年 ヒューマン・コンピュータ・インタラクション	
	第5					理(数学) 4年 応用数理学7
3 時 限	第1	基(電・化) 1年 情報科学基礎		工(然) 1年 情報科学基礎A		
	第2	基(電・化) 1年 情報科学基礎	基(機械) 2年 情報科学演習	工(然) 1年 情報科学基礎A	基(情報) 1年 プログラミングA	
	第3	基(情報) 1年 プログラミングA	基(機械) 2年 情報科学演習	工(然) 1年 情報科学基礎A	基(情報) 1年 プログラミングA	
	第4	基(情報) 1年 プログラミングA				
	第5	基(電・化) 1年 情報科学基礎		工(然) 1年 情報科学基礎A		
4 時 限	第1		理 1年 情報科学基礎		医(保) 1年 情報社会基礎／情報科学基礎	
	第2	医(医)・歯 1年 情報科学基礎	理 1年 情報科学基礎	法(法) 1年 情報社会基礎	医(保) 1年 情報社会基礎／情報科学基礎	理(数学) 2年 実験数学1
	第3	医(医)・歯 1年 情報科学基礎	理 1年 情報科学基礎	法(法) 1年 情報社会基礎	医(保) 1年 情報社会基礎／情報科学基礎	外 1年 タイ語5
	第4	医(医)・歯 1年 情報科学基礎	理 1年 情報科学基礎	法(法) 1年 情報社会基礎	医(保) 1年 情報社会基礎／情報科学基礎	外 1年 インドネシア語5
	第5		理 1年 情報科学基礎			外 1年 ハンガリー語1
5 時 限	第1	全学部 1年 学問への扉(システム開発ことはじめ)			外 1年 情報社会基礎	
	第2		基(情) 1年 情報科学基礎	基(シ) 1年 情報科学基礎	外 1年 情報社会基礎	
	第3		基(情) 1年 情報科学基礎	基(シ) 1年 情報科学基礎	外 1年 情報社会基礎	法(国) 1年 情報社会基礎
	第4				外 1年 情報社会基礎	法(国) 1年 情報社会基礎
	第5			基(シ) 1年 情報科学基礎	外 1年 情報社会基礎	

・授業時間 1時限 8:50～10:20、2時限10:30～12:00、3時限13:30～15:00、4時限15:10～16:40、5時限16:50～18:20

・端末数 第1教室66台、第2教室82台、第3教室66台、第4教室45台、第5教室72台

(端末数には教師用端末は含みません)

2021年度夏学期情報教育教室使用計画表

時 限	教 室	月	火	水	木	金
1 時 限	第1	基(シ) 2年 コンピュータ工学基礎演習				
	第2					
	第3					
	第4					
	第5			基(システム) 2年 コンピュータ基礎演習		
2 時 限	第1					
	第2					
	第3					
	第4	理(数学) 3年 実験数学3			基(情報) 4年 ヒューマン・コンピュータ・インタラクション	
	第5					理(数学) 4年 応用数理学7
3 時 限	第1					
	第2		基(機械) 2年 情報科学演習		基(情報) 1年 プログラミングA	
	第3	基(情報) 1年 プログラミングA	基(機械) 2年 情報科学演習		基(情報) 1年 プログラミングA	
	第4	基(情報) 1年 プログラミングA				
	第5					
4 時 限	第1					
	第2					理(数学) 2年 実験数学1
	第3					外 1年 タイ語5
	第4					外 1年 インドネシア語5
	第5					外 1年 ハンガリー語1
5 時 限	第1	全学部 1年 学問への扉(システム開発ことはじめ)			外 1年 情報社会基礎	
	第2				外 1年 情報社会基礎	
	第3				外 1年 情報社会基礎	
	第4				外 1年 情報社会基礎	
	第5				外 1年 情報社会基礎	

・授業時間 1時限 8:50～10:20、2時限10:30～12:00、3時限13:30～15:00、4時限15:10～16:40、5時限16:50～18:20

・端末数 第1教室66台、第2教室82台、第3教室66台、第4教室45台、第5教室72台
(端末数には教師用端末は含みません)

2021年度秋学期情報教育教室使用計画表

時限	教室	月	火	水	木	金
1時限	第1					
	第2	理(化学) 2年 化学プログラミング				
	第3					
	第4					
	第5					
2時限	第1	基(機械) 2年 数値解析演習				
	第2	基(機械) 2年 数値解析演習				理(数学) 2年 実験数学2
	第3		基(化学2年・合成3年) 化学工学プログラミング	基(化学) 3年 プロセス工学	医(保) 1年 実践情報活用論	
	第4	外 1年 ベトナム語2	基(化学2年・合成3年) 化学工学プログラミング	基(化学) 3年 プロセス工学	医(保) 1年 実践情報活用論	
	第5		理(数学) 3年 数値計算法基礎			
3時限	第1			全学部 全学年 計算機シミュレーション入門	基(情報) 1年 プログラミングB	
	第2					基(化学) 2年 化学工学演習Ⅳ
	第3			基(システム) 2年 コンピュータ工学演習	基(情報) 1年 プログラミングB	
	第4			基(システム) 2年 コンピュータ工学演習		
	第5					
4時限	第1	基(情報) 1年 プログラミングB				
	第2			基(電子) 2年 基礎工学PBL		
	第3	基(情報) 1年 プログラミングB				
	第4		人 1年 Data Processing Skills			
	第5		基(合成) 2年 情報処理入門			
5時限	第1					
	第2	法 2年 法情報学1		法 2年 法政情報処理		
	第3					
	第4					
	第5					外(再履修生用) 情報社会基礎
6限	第3	基・理・工 3年 情報科教育法Ⅰ				

- ・授業時間 1時限 8:50～10:20、2時限10:30～12:00、3時限13:30～15:00、4時限15:10～16:40、5時限16:50～18:20、6時限18:30～20:00
- ・端末数 第1教室66台、第2教室82台、第3教室66台、第4教室45台、第5教室72台
(端末数には教師用端末は含みません)

2021年度冬学期情報教育教室使用計画表

時限	教室	月	火	水	木	金
1時限	第1					
	第2	理(化学) 2年 化学プログラミング				
	第3					
	第4					
	第5					
2時限	第1	基(機械) 2年 数値解析演習				
	第2	基(機械) 2年 数値解析演習				理(数学) 2年 実験数学2
	第3		基(化学2年・合成3年) 化学工学プログラミング	基(化学) 3年 プロセス工学	医(保) 1年 実践情報活用論	
	第4	外 1年 ベトナム語2	基(化学2年・合成3年) 化学工学プログラミング	基(化学) 3年 プロセス工学	医(保) 1年 実践情報活用論	
	第5		理(数学) 3年 数値計算法基礎			
3時限	第1			全学部 全学年 計算機シミュレーション入門	基(情報) 1年 プログラミングB	
	第2					基(化学) 2年 化学工学演習IV
	第3			基(システム) 2年 コンピュータ工学演習	基(情報) 1年 プログラミングB	
	第4			基(システム) 2年 コンピュータ工学演習		
	第5					
4時限	第1	基(情報) 1年 プログラミングB				
	第2					
	第3	基(情報) 1年 プログラミングB				
	第4		人 1年 Data Processing Skills			
	第5		基(合成) 2年 情報処理入門			
5時限	第1					
	第2	法 2年 法情報学1		法 2年 法政情報処理		
	第3					
	第4					
	第5					
6限	第3	基・理・工 3年 情報科教育法 I				

- ・授業時間 1時限 8:50～10:20、2時限10:30～12:00、3時限13:30～15:00、4時限15:10～16:40、5時限16:50～18:20、6時限18:30～20:00
- ・端末数 第1教室66台、第2教室82台、第3教室66台、第4教室45台、第5教室72台
(端末数には教師用端末は含みません)

2021年度春・夏 学期CALL教室使用計画表

時限	教室	月	火	水	木	金
1 限目	第1 A	工(理・電) 1年 総合英語(Academic Skills) N. リー	医・歯・薬 1年 総合英語(Academic Skills) N. リー		理・工(然・地・環) 1年 総合英語(Project-based English) 岡田 悠佑	医(医)・薬・基 2年 総合英語(Performance Workshop) A. 村上スミス
	第1 B				理・工(然・地・環) 1年 総合英語(Academic Skills) 今尾 康裕	
	第2		外 1年 フランス語5 岡田 友和		理・工(然・地・環) 1年 総合英語(Performance Workshop) A. 村上スミス	
	第3	人・文 1年 地域言語文化演習(ドイツ語) 大前 智美	医・歯・薬 1年 総合英語(Content-based English) 日野 信行		理・工(然・地・環) 1年 総合英語(Project-based English) 田中 美津子	
	第4		外 1年 トルコ語5 Akabay, Okan Haluk		外 1年 トルコ語2 Akabay, Okan Haluk	
2 限目	第1 A	医・薬・基(電・化・情) 1年 総合英語(Academic Skills) N. リー				理・工(理・電) 1年 総合英語(Performance Workshop) A. 村上スミス
	第1 B	外 1年 ベトナム語2 清水 政明	言(大学院) 翻訳研究A A. 村上スミス		外 1年 フィリピン語3 宮原 暁	外 1年 ロシア語1(B) 上原 順一
	第2	医・薬・基(電・化・情) 1年 総合英語(Project-based English) 岡田 悠佑	工(然・地・環) 1年 地域言語文化演習(ドイツ語) 岩居 弘樹		外 1年 インドネシア語3 ドゥイ・ブスビトリニ	医・歯・薬 1年 地域言語文化演習(ドイツ語) 岩居 弘樹
	第3	理 1年 地域言語文化演習(ドイツ語) 大前 智美	文・理(数・物) 2年 総合英語(Content-based English) 日野 信行	医・歯・薬 2年 総合英語(Project-based English) 三木 訓子	基 1年 総合英語(Project-based English) 田中 美津子	理・工(理・電) 1年 総合英語(Content-based English) 日野 信行
	第4				外 1年 トルコ語4 Akabay, Okan Haluk	
3 限目	第1 A					
	第1 B	外 1年 ハンガリー語2 岡本 真理				外 1年 ロシア語1(A) 上原 順一
	第2	歯・工(然・地・環) 1年 総合英語(Project-based English) 岡田 悠佑				
	第3	歯・工(然・地・環) 1年 総合英語(Project-based English) 今尾 康裕			医(保)・歯 2年 総合英語(Project-based English) 今尾 康裕	人・文・法 1年 総合英語(Content-based English) 日野 信行
	第4		交換留学生等 イノベーションの管理と変遷 近藤 佐知彦・三森 八重子	交換留学生等 異文化コミュニケーションとパフォーマンス 中野 遼子		
4 限目	第1 A	文・法・基(シス) 1年 総合英語(Academic Skills) N. リー	人・文 2年 英語選択 N. リー			外 1年 ヒンディー語2 松木園 久子
	第1 B	外 1年 ハンガリー語3 岡本 真理				法・経 2年 総合英語(Performance Workshop) A. 村上スミス
	第2	外 1年 ヒンディー語1 長崎 広子				外 1年 ロシア語3 三浦 由香利
	第3	外 1年 タイ語1 村上 忠良	言(大学院) 第二言語教育実践研究A 日野 信行			法・経 2年 総合英語(Content-based English) 日野 信行
	第4					
5 限目	第1 A		言(大学院) 第二言語教育方法論A 小口 一郎			
	第1 B	全学部 1年 特別外国語演習(トルコ語) I 藤家 洋昭				全学部 1年 学問への扉(世界の言葉探検) 江口 清子
	第2	理 1～4年 科学英語基礎 Hail.Eric.Mathew				
	第3					
	第4					

・授業時間 1時限 8:50～10:20、2時限 10:30～12:00、3時限 13:30～15:00、4時限 15:10～16:40、5時限 16:50～18:20
 ・端末数 第1-A教室 64台、第1-B教室 36台、第2教室 60台、第3教室 60台、第4教室(アクティブラーニング教室 定員:30名)
 (端末数には教師用端末を含みません)

2021年度秋・冬 学期CALL教室使用計画表

時 限	教 室	月	火	水	木	金
1 限 目	第 1 A	文・理(数・物) 2年 総合英語(Academic Skills) N. リー	外 1年 ロシア語6 高島 尚生			
	第 1 B				理・工(然・地・環) 1年 総合英語(Project-based English) 岡田 悠佑	
	第 2	文・理(数・物) 2年 総合英語(Performance Workshop) A. 村上スミス	外 1年 フランス語5 岡田 友和		理・工(然・地・環) 1年 総合英語(Academic Skills) 今尾 康裕	
	第 3	人・文 1年 地域言語文化演習(ドイツ語) 大前 智美	医・歯・薬 1年 総合英語(Content-based English) 日野 信行		理・工(然・地・環) 1年 総合英語(Performance Workshop) D. マレー	
	第 4		外 1年 トルコ語5 Akbay, Okan Haluk		外 1年 トルコ語2 Akbay, Okan Haluk	
2 限 目	第 1 A	医・歯・基(化・シス・情) 1年 総合英語(Academic Skills) N. リー			外 1年 フィリピン語3 宮原 暁	医・歯・薬 1年 地域言語文化演習(ドイツ語) 瀧田 恵巳
	第 1 B	医・歯・基(化・シス・情) 1年 総合英語(Project-based English) 三木 訓子	言(大学院) 翻訳研究B A. 村上スミス		外 1年 インドネシア語3 ドウイ プスビトリニ	外 1年 ロシア語1(B) 上原 順一
	第 2	医・歯・基(化・シス・情) 1年 総合英語(Performance Workshop) A. 村上スミス	工(然・地・環) 1年 地域言語文化演習(ドイツ語) 岩居 弘樹			理・工(理・電) 1年 総合英語(Content-based English) 日野 信行
	第 3		工(理・電) 1年 総合英語(Content-based English) 日野 信行	全学部 1年 アドバンス情報リテラシー 堀 一成	基 1年 総合英語(Performance Workshop) D. マレー	医・歯・薬 1年 地域言語文化演習(ドイツ語) 岩居 弘樹
	第 4	理 2-4年 地域言語文化演習(ドイツ語) 大前 智美			外 1年 トルコ語4 Akbay, Okan Haluk	
3 限 目	第 1 A	薬・工(然・地・環) 1年 総合英語(Project-based English) 今尾 康裕				
	第 1 B	外 1年 ハンガリー語2 岡本 真理			人 1年 総合英語(Project-based English) 岡田 悠佑	外 1年 ロシア語1(A) 上原 順一
	第 2	薬・工(然・地・環) 1年 総合英語(Performance Workshop) A. 村上スミス				
	第 3	薬・工(然・地・環) 1年 総合英語(Project-based English) 岡田 悠佑	文 2年 英語選択 日野 信行			
	第 4			交換留学生等 言語コミュニケーションとパフォーマンス 中野 遼子		
4 限 目	第 1 A	文・法・基(電) 1年 総合英語(Academic Skills) N. リー	人・文 1年 英語選択 N. リー			外 1年 ロシア語3 三浦 由香利
	第 1 B	外 1年 ハンガリー語3 岡本 真理	交換留学生等 コンピュータを活用した語学学習 魚崎 典子			外 1年 インドネシア語5 菅原 由美
	第 2	外 1年 ヒンディー語1 長崎 広子				外 1年 ヒンディー語2 松木園 久子
	第 3	外 1年 ビルマ語3 大塚 行誠	言(大学院) 第二言語教育実践研究B 日野 信行			全学部 2年 ドイツ語中級 小川 敦
	第 4					
5 限 目	第 1 A					全学部 1年 中東の文化と社会を知るC 竹原 新
	第 1 B	全学部 1年 特別外国語演習(ハンガリー語) I 岡本 真理				
	第 2	全学部 1年 特別外国語演習(ヒンディー語) I 長崎 広子				
	第 3	理 1~4年 科学英語基礎 Hail, Eric, Mathew				
	第 4					

・授業時間 1時限 8:50~10:20、2時限 10:30~12:00、3時限 13:30~15:00、4時限 15:10~16:40、5時限 16:50~18:20

・端末数 第1-A教室 64台、第1-B教室 36台、第2教室 60台、第3教室 60台、第4教室(アクティブラーニング教室 定員:30名)
(端末数には教師用端末を含みません)

情報教育システム 分散配置端末部局別責任者名簿

2021 年 4 月 1 日現在

部 局 名	管 理 責 任 者	運 用 責 任 者	設 置 場 所
人間科学研究科	教授 西森 年寿 (内線 吹 8123)	助教 宮本 友介 (内線 吹 4037)	本館 1 階 計算機室
理学研究科	教授 藤原 彰夫 (内線 豊 5721)	技術専門職員 堀江 圭都 (内線 豊 6782)	本館 2 階 B214 号室
医学系研究科 (医学部)	准教授 武田 理宏 (内線 医 5900)	准教授 岡田 佳築 (内線 医 5900)	講義棟 1 階学生端末室
医学系研究科 (保健学専攻)	教授 石田 隆行 (内線 医 2573)	教授 渡邊 幹夫 (内線 医 2592)	2 階ラーニングリソース センター
薬学研究科	教授 大久保 忠恭 (内線 吹 8220)	准教授 吉田 卓也 (内線 吹 8221)	1 号館 1 階 自習室
工学研究科	教授 安田 弘行 (内線 吹 7497)	教務課課長補佐 金田 幸三 (内線 吹 7222)	UIW 棟 (2 階) 情報実習室
附属図書館	事務部長	情報推進部情報基盤課 教育系システム班 (内線 豊 6805)	総合図書館 B 棟 2 階, 3 階 理工学図書館西館 1 階 生命科学図書館 2 階

分散端末は、各部局によって管理されています。端末室の利用方法・開室時間は、各分散端末の管理責任者または運用責任者にお問い合わせください。

機器の故障については情報推進部情報基盤課 教育系システム班（豊中地区：内線 6801,6805）までお知らせください。

教室・端末配置図

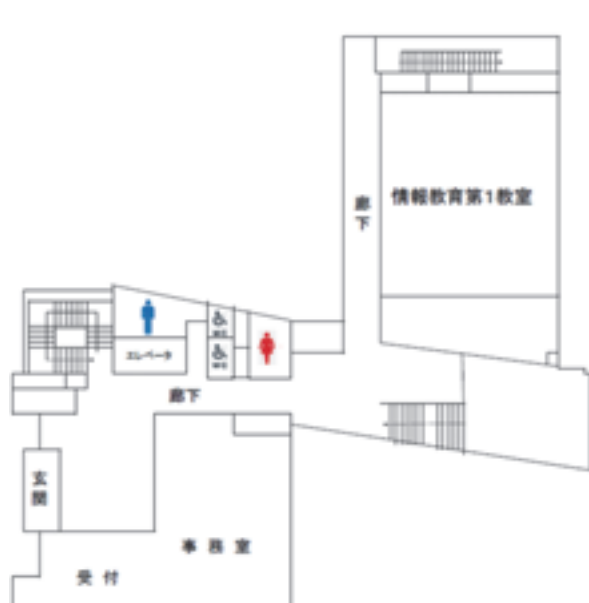
●サイバーメディアセンター 豊中教育研究棟

1階 情報教育第1教室

2階 情報教育第2教室・情報教育第3教室・情報教育第4教室

3階 情報教育第5教室・CALL第1-A教室・CALL第1-B教室

4階 CALL第2教室・CALL第3教室・CALL第4教室



情報教育第1教室：Windows 端末 66台



情報教育第2教室：Windows 端末 82台

情報教育第3教室：Windows 端末 66台

情報教育第4教室：Windows 端末 45台



情報教育第5教室：Windows 端末 72台

CALL第1-A教室：Windows 端末 64台

CALL第1-B教室：Windows 端末 36台

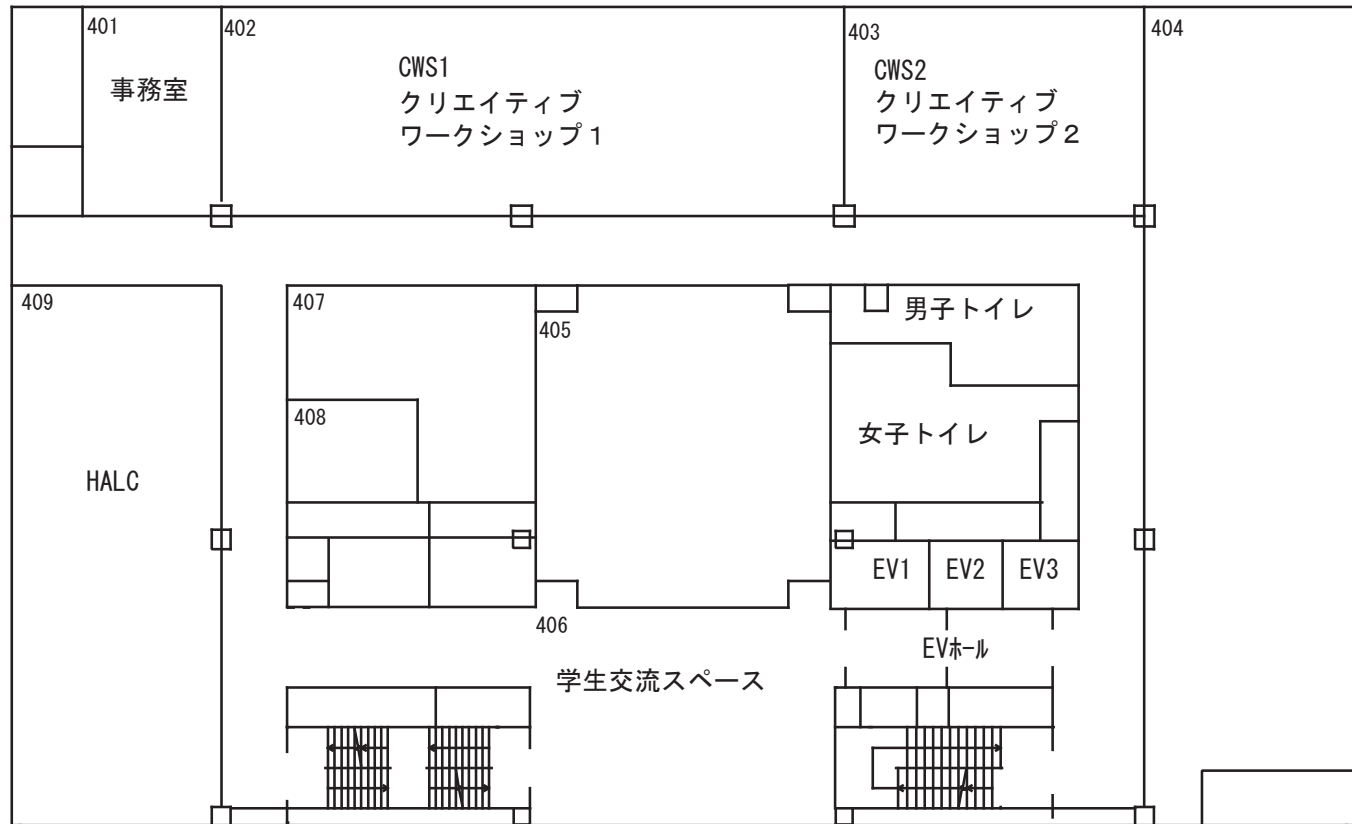


CALL第2教室：Windows 端末 60台

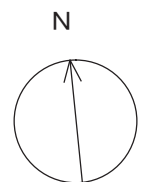
CALL第3教室：Windows 端末 60台

CALL第4教室：アクティブラーニング型：定員30名

●（箕面）外国語学研究講義棟 4階



CWS1 : Windows 10	箕面教育システム端末	60台
CWS2 : Windows 10	箕面教育システム端末	25台
HALC : ios	iPadタブレット端末	50台



大阪大学サイバーメディアセンター教育用計算機システム利用規程

第1条 この規程は、大阪大学サイバーメディアセンター（以下「センター」という。）が管理・運用する教育用計算機システム（以下「教育用計算機システム」という。）の利用に関し、必要な事項を定めるものとする。

第2条 教育用計算機システムを利用することのできる者は、次の各号に掲げる者とする。

- (1) 大阪大学（以下「本学」という。）の教職員
- (2) 本学の学生
- (3) その他サイバーメディアセンター長（以下「センター長」という。）が適当と認めた者

2 教育用計算機システムを利用する者（以下「利用者」という。）は、あらかじめ、大阪大学全学IT認証基盤サービスを利用するための大阪大学個人IDの付与を受けるものとする。

第3条 全学共通教育規程、各学部規程及び各研究科規程で定める授業科目の授業を行う場合で、センターの豊中教育研究棟情報教育教室又はCALL教室（以下「情報教育教室等」という。）において教育用計算機システムを利用しようとするときは、当該授業科目の担当教員は、あらかじめ、所定の申請書を所属部局長（全学共通教育科目の授業に利用する場合にあっては、原則として、全学教育推進機構長とする。）を通じてセンター長に提出し、その承認を受けなければならない。

2 前項に規定する場合のほか、センター長は、前条第1項第1号又は第3号に掲げる者から情報教育教室等における教育研究のための教育用計算機システムの利用に係る申請があった場合には、前項の利用に支障のない範囲内において、これを許可することができる。

第4条 センター長は、前条の申請を承認したときは、その旨を文書により申請者に通知するものとする。

2 前項の利用の承認期間は、1年以内とする。ただし、当該会計年度を超えることはできない。

第5条 利用者は、教育用計算機システムの利用に際しては、別に定めるガイドラインに従わなければならない。

第6条 センター長は、必要に応じて、利用者が使用できる教育用計算機システムの使用について制限することができる。

第7条 センター長は、必要に応じて、利用者に対し利用の状況及び結果についての報告を求めることができる。

第8条 利用者の所属部局（全学共通教育科目の授業に利用する場合にあっては、原則として、全学教育推進機構とする。）は、その利用に係る経費の一部を負担しなければならない。

2 前項の額及び負担の方法は、センター教授会の議を経て、センター長が別に定める。

3 第1項の規定にかかわらず、センター長が特に必要と認めたときは、経費の負担を免除することができる。

第9条 利用者が、この規程に違反した場合又は利用者の責によりセンターの運営に重大な支障を生じさせたときは、センター長は、その者の利用を一定期間停止することができる。

第10条 この規程に定めるもののほか、教育用計算機システムの利用に関し必要な事項は、センター長が定める。

附 則

- 1 この規程は、平成12年4月1日から施行する。
- 2 大阪大学情報処理教育センター利用規程（昭和57年3月17日制定）は、廃止する。
- 3 この規程施行前に大阪大学情報処理教育センター利用規程に基づき、平成12年度の利用承認を受けた利用者にあつては、この規程に基づき利用の登録があつたものとみなす。

附 則

この改正は、平成16年4月1日から施行する。

附 則

この改正は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

この改正は、平成24年4月1日から施行する。

附 則

この改正は、平成26年4月15日から施行する。

教育用計算機システム、学生用電子メールシステム利用者ガイドライン

1. はじめに

この利用者ガイドラインは、教育用計算機システムに関係する各種の規程等を分かりやすく解説しています。また、学生用電子メールシステムについても解説しています。全ての利用者は、この利用者ガイドライン(指針)をよく読んでから教育用計算機システム及び学生用電子メールシステムを利用して下さい。

また、各種の規程とは次のものです。先ず、本学が提供する情報システムを利用するにあたり、「大阪大学情報セキュリティポリシー」¹等を遵守しなければいけません。教育用計算機システムの利用については、「教育用計算機システム利用規程」²があります。

なお、教育用計算機システムは大阪大学総合情報通信システムに接続して運用していますので、教育用計算機システムの全ての利用者は「大阪大学総合情報通信システム利用者ガイドライン」を遵守しなければいけません。

この利用者ガイドラインは、変更することがあります。変更した場合は、ホームページ等の電子的な手段で広報しますので、常に最新の利用者ガイドラインを参照して下さい。

2. 教育用計算機システム

「教育用計算機システム」とは、サイバーメディアセンター豊中教育研究棟の教室、箕面総合研究棟4階・5階の教室及び分散端末室のコンピュータ、通信機器及びこれらの上で動作するソフトウェア群によって構成されるシステムをいいます。教育用計算機システムは、サイバーメディアセンターが管理・運用しています。

3. 学生用電子メールシステム

大阪大学が提供する学生用電子メールシステムは、本学からの情報発信及び情報交換を通じて、主に在学中の修学に関する情報を提供するものです。そのため、ルールやマナーを守った安全な方法で使用しなければ、多くの利用者に迷惑をかけることになり、さらには、本学の社会的信用を失わせる要因となる可能性があります。このようなリスクを軽減し、情報資産を保護するとともに、電子メールを安全に利用するために次のことを遵守してください。また、卒業後は本学と交流できる機会を提供するための電子メールアドレスが用意されています。

・利用対象者

学生用電子メールシステムは、大阪大学の全ての学生及びサイバーメディアセンターの教室で授業を担当される教員が利用できます。

・メールアカウントとパスワードの管理

大学が配付するメールアカウントとパスワードを取得した後は、所有者個人が管理することになります。また、他人にメールアカウントやパスワードを教えることはできません。

・情報セキュリティポリシー等の遵守

学生用電子メールシステムの利用者は、大阪大学情報セキュリティポリシー等を遵守する必要があります。

・利用者の責任

学生用電子メールシステムを利用したことにより発生した、いかなる損失・損害に関しても、利用者が一切の責任を負います。

・利用の停止

卒業後、本人からの申し入れにより、学生用電子メールシステムの当該アカウントの利用を停止することができます。

・学生用電子メールシステムの利用に関する相談窓口

メールの操作方法及びシステム運用・障害に関するものは、以下の相談窓口へ連絡して下さい。

情報推進部情報基盤課教育系システム班

TEL:06-6850-6806

Mail:info@ecs.osaka-u.ac.jp

メールに書かれた内容に関することは、そのメールに書かれている問い合わせ先をお願いします。

4. 違法行為と不正行為

4.1 コンピュータ上／ネットワーク上の不正行為

コンピュータ上及びネットワーク上の行為にも、日本国内においては国内法が適用されます。ただし、違法行為を禁じる条項は教育用計算機システム、学生用電子メールシステムの利用者ガイドラインには含まれていません。また、「法に触れない行為」と「して良いこと」は違います。特に教育的見地から、

教育用計算機システム及び学生用電子メールシステム上で行われる、倫理に反する行為及び著しく利用マナーに反する行為を「不正行為」と呼びます。³

教育用計算機システムは大学の施設ですので、大学の施設を用いて無断で行ってはいけないことは、教育用計算機システムにも適用されます。教育用計算機システムを利用して財産的利益を得ること、例えば、プログラミングのアルバイト、家庭教師や塾講師のアルバイトのための文書作成を行ってはいけません。

目的外利用を含めた不正行為の内、他人のアカウントを使用することや他人に自分のアカウントを使用させること及びシステム運用業務の妨害行為は特に悪質な不正として取り扱います。悪質と判断した利用者に対しては、利用資格の停止や制限を行います。また、大阪大学の規則に従った懲戒が行われることがあります。

教育用計算機システムを利用する上で、他の利用者や教育用計算機システム運用管理者のパスワードを調べる行為を行ってはいけません。そのような行為は、コンピュータの不正利用を行うための準備行為とみなされます。このような、不正行為の準備としか考えられない行為を「不正予備行為」と呼びます。不正予備行為は、不正行為と同じように扱います。

4.2 講義/演習中の不正行為

講義や演習中に教育用計算機システム利用規程に反する行為が行われた場合、それが講義や演習にとっての不正行為かどうかとは別に、教育用計算機システム利用規程を適用します。2章に記載した場所における講義や演習における、カンニング、代理出席、他人のレポートのコピーの提出に対しては、一般の講義室における場合と同じように扱います。つまり、不正行為への対処としての出席の不認定、単位の不認定は、一般の講義室における場合と同じように、大阪大学の規則に従います。

例えば、ある学生Aが自分のログイン名とパスワードを友人Bに教えて、教育用計算機システムを利用する講義の代理出席を行った場合を考えてみましょう。他人のアカウントを利用し、また、させているので、A、Bともに教育用計算機システムの不正利用者として扱います。教育用計算機システム運用管理者は、「代理出席を行ったこと」に対する処分内容には関知しません。担当教員は、裁量により出席点を減点したり処分を猶予したりすることがあります。

4.3 他組織への侵入

教育用計算機システムのネットワーク環境は、「ファイアーウォール」と呼ばれるネットワーク機器を用いることにより、他のネットワークと直接通信ができないように制限を加えています。これは、他組織からの不正侵入や、他組織への不正侵入を防ぐための措置です。

大阪大学から他組織のネットワークに不正に侵入した場合、大阪大学全体が外部のネットワークとの接続を切られるだけでなく、場合によっては国際問題に発展する可能性もあります。他組織に迷惑をかけないように大学側でも対処していますが、侵入を試すような行為を行った場合は処分の対象となります。

他組織のネットワークへの不正侵入以外にも、大量の電子メールを送りつける等、他組織のシステムの運営妨害を行なった場合は侵入と同様に扱います。また、パスワードの付け忘れ等、管理上の不備のあるコンピュータであっても、侵入してはいけないことに変わりはありません。

5. 知的財産の尊重

著作物及びソフトウェアの著作権を尊重して下さい。教育用計算機システムに導入されているソフトウェア(フリーソフトウェアを除く)及びドキュメントはコピーして持ち出してはいけません。フリーソフトウェアを外部から持ち込んで利用する場合は、利用者個人の責任の基に行ってください。

著作物の無断コピーに教育用計算機システムを使わないで下さい。著作権法では、私的使用の場合に関する例外事項の規定があります。教育用計算機システムは利用者の私物でも家庭内でもないので、教育用計算機システムのコンピュータの利用は私的使用にはあたらないと考えられます。

電子掲示板等インターネット上の記事は一般の著作物と同じです。著作権を侵害しているかどうかの判断は非常に難しいですが、例えば、電子掲示板の記事に、出典を明記せずに著作物(歌詞等を含む)の一部を引用することや、出典を明記しても著作物の全部を引用すること等は著作権を侵害していると考えられます。

6. 窃盗行為の禁止

教育用計算機システム利用規程には明文化していませんが、教育用計算機システムのコンピュータや、その部品あるいは未使用のプリンタ用紙等を外へ持ち出すことは、窃盗罪となります。

7. 運用妨害の禁止

コンピュータやプリンタの電源の操作及びリセット操作を行ってはいけません。例外は機器からの発煙等の緊急時、教育用計算機システム運用管理者が操作を指示した場合です。

教育用計算機システムの運用を妨害するような行為(他の利用者のファイル消去、故意のネットワーク妨害等)が発生した場合は、厳重な処分を行います。経済的な被害を与えない行為でも、教育用計算機システムの運用妨害となる行為をしてはいけません。電源プラグやコネクタを外す等の物理的な行為の他、ウィルスの送付等の間接的な行為、CD-ROMの装置に異物を入れる等、故意に故障を引き起こす行為もしてはいけません。

8. ファイルの扱い

教育用計算機システムの各利用者は、教育用計算機システム内の、ある一定量のファイル領域を利用できます。しかし、ファイル領域はあくまでも大阪大学の資産の一部であり、利用者の私有物となったわけではありません。教育用計算機システムでは、ある利用者のファイルを他の利用者からも読める(すなわちコピーできる)ように、ファイルの保護モードを各利用者が設定することもできます。利用者の設定ミスによって、思いがけずファイルを他の利用者に読まれてしまうことも考えられます。

このため、他の利用者に読まれたくないファイルは、教育用計算機システム上に置かないほうが安全です。

9. 本システムの運用管理について

教育用計算機システム及び学生用電子メールシステム運用管理者は、違法行為／不正行為を発見した場合、当該アカウントの利用停止の措置を行います。不正行為に使われたアカウントが盗用されたものであった場合、結果として盗用された被害者の利用を停止することになりますが、盗用の事実を確認後、利用停止を解除します。

利用者の氏名、入学年、所属学部、ログイン名及び本システムの利用頻度等は、違法行為／不正行為が疑われる場合は秘密情報として扱いません。

教育用計算機システム運用管理者は、利用者のファイル領域のプライバシーを尊重しますが、不正なファイルの存在等については、定期的な自動探査を行い、必要に応じて手動操作による内容の監査等を行うことがあります。また、機器故障の対策として、利用者の個人ファイル領域を教育用計算機システム運用管理者がハードディスク等にコピーし、保管することがあります。

教育用計算機システムのコンピュータに暗号化したファイルを保管することは不正行為ではありませんが、何らかの不正行為の手段としてファイルの暗号化を行なっていると推定される場合は、内容の開示を当該利用者に要求することがあります。また、ファイル領域の使用量や受信した電子メールのサイズには制限があります。この制限を越えた利用者は、ファイルや電子メールを保存できません。

10. 不正利用等に関する処分

コンピュータの窃盗や破損は、大学施設内の窃盗や破損の場合と同じように扱います。違法行為／不正行為の継続を防ぐため、あるいは発生を防止するための、アカウントの利用停止等の緊急措置は、それを発見した教育用計算機システム運用管理者の判断で即座に行います。

11. ネットワーク・エチケット

一般にネットワークを快適に利用する際に注意すべきことがいくつかあります。これらは、主に「ネットワーク・エチケット(ネチケット)」と呼ばれるものです。インターネットの世界では自己責任、自己防衛が原則です。ここでは、インターネットを利用する際に必要最小限守るべきことを列挙します。

- ・アカウント・パスワードを厳重に管理する。
- ・社会ルールを守る。
- ・誹謗中傷しない。
- ・著作権を侵害しない。
- ・プライバシーを侵害しない。

注釈

1 (セキュリティポリシー :

<http://www.oict.osaka-u.ac.jp/securitypolicy>)

2 (関連規程等の記載場所 :

<http://www.cmc.osaka-u.ac.jp/edu/guideline/guideline.php>)

- 3 平成12年2月13日より「不正アクセス行為の禁止等に関する法律」が施行されており、現在では不正アクセスやその助長行為は懲役・罰金等の刑罰の対象となります。

大阪大学総合情報通信システム利用者ガイドライン

1. はじめに

この利用者ガイドラインは、大阪大学におけるキャンパスネットワークで、学内の教育研究活動を支える ICT 基盤である、大阪大学総合情報通信システム (Osaka Daigaku Information Network System の略で、以下「ODINS」という。) が提供するサービスについて分りやすく解説しています。

また、ODINS が提供するサービスを利用するにあたり次の諸規程等を遵守する必要がありますので、必ず諸規定等もご一読ください。

- ・大阪大学情報セキュリティポリシー
- ・大阪大学総合情報通信システム利用規程
- ・大阪大学総合情報通信システム運用内規

このガイドラインは、変更することがあります。変更した場合は、ホームページ等の電子的な手段で広報しますので、常に最新のガイドラインを参照して下さい。

2. 用語の定義

本ガイドラインで使用する用語については次のとおりです。

- (1) 「SSID」とは、無線 LAN におけるアクセスポイントの識別名です。
- (2) 「スパムメール」とは、受信者の意向を無視して、無差別かつ大量に送信される、電子メールを主としたメッセージです。
- (3) 「アカウント」とは、コンピュータの利用者を識別するための標識となる文字列のことであり、WEB 上でなんらかのサービスを受ける際の身分を表します。
- (4) 「ファイアウォール」とは、あるコンピュータやネットワークと外部ネットワークの境界に設置され、内外の通信を中継・監視し、外部の攻撃から内部を保護するためのソフトウェアや機器等のシステムです。
- (5) 「部局ネットワーク担当者」とは、当該部局等の ODINS の運用に関する業務を支援している担当者です。詳しくは大阪大学総合情報通信システム運用内規をご覧ください。

3. 提供しているサービスについて

ODINS では、次のとおり利用者向けサービスと管理者向けサービスの2種類用意しています。基本的には利用者や管理者が意識することなく利用しているサービスですが、個別に設定等が必要なものについては、マニュアルを確認のうえご利用ください。

3.1 利用者向けサービス

- キャンパスネットワークサービス

各キャンパスにおいてネットワーク環境を提供するサービスです。独自でネットワーク回線を用意していない限り、本学のネットワーク通信は全て ODINS のキャンパスネットワークサービスにより提供しています。

● 有線 LAN 認証サービス

ODINS では有線 LAN 環境に認証設定を施し、利用制限を行うサービスを提供しています。認証が必要な場所やマニュアル等は、適宜更新されますので、次をご確認ください。

(<http://www.odins.osaka-u.ac.jp/gakunai/manuals.html>)

● キャンパス無線 LAN サービス

本学の講義室やセミナー室等の公共性の高い施設等を中心に整備した、無線 LAN 環境を提供するサービスです。無線 LAN を利用するためには、ODINS 無線 LAN が提供された場所で、SSID (odins-1x) を選択することで利用することができます。詳しくは、次をご覧ください。

- ・無線 LAN アクセスポイント一覧

(<http://www.odins.osaka-u.ac.jp/gakunai/accesspoint.html>)

- ・キャンパス無線 LAN サービス利用マニュアル

(<http://www.odins.osaka-u.ac.jp/gakunai/manuals.html>)

本学では、ODINS が整備したキャンパス無線 LAN サービスに加え、大学等教育研究機関の間でキャンパス無線 LAN の相互利用を実現する、国際無線 LAN ローミング基盤サービスである eduroam も提供しています。eduroam は大阪大学個人 ID を所有する学生及び教職員等に提供するサービスであり、マイハндаイを経由した申請により利用可能です。eduroam を利用すれば、世界中の eduroam に加盟している機関で無線 LAN サービスを利用することができます。

設定方法につきましては、次の利用マニュアルをご覧ください。

(<http://www.odins.osaka-u.ac.jp/gakunai/documents/eduroam.html>)

● 迷惑メールフィルタリングサービス

本学のドメインを持つメールサービスに対し、メールのフィルタリング機能を提供するサービスです。このサービスは、ODINS 側でスパムメールの削除を行うのではなく、スパムメールであるかの判定を行い、その情報をメールヘッダに付加し利用者に届けるものです。このことにより、利用者側でスパムメールの振り分けが可能となり、システム側で正常なメールを誤って削除されことなく受け取ることが可能となります。年々増加しているメールを用いたサイバー攻撃対策のためにも、本学内に設置しているメールサーバをご利用の方は、必ずメールソフトへの設定をお願いします。

設定方法につきましては、次の利用マニュアルをご覧ください。

(<http://www.odins.osaka-u.ac.jp/gakunai/documents/>)

3.2 管理者向けサービス

- ビジター用アカウント発行サービス（ビジター認可システム）

本学の来訪者へネットワーク環境を提供するために必要なアカウントを発行するためのサービスです。アカウント発行は、権限を持った方が発行可能です。詳しくは大阪大学総合情報通信システム無線LANビジターID運用要項をご覧ください。

- 通信監視サービス（ネットワーク侵入検知システム）

ODINS を経由する学内外通信を監視し、不正アクセスやウイルスによる挙動を検知し、部局等へ通知するサービスです。本サービスで取得した情報を解析し、サイバー攻撃やウイルス感染の挙動等が確認された場合、情報セキュリティインシデントとして当該部局に対応依頼を行っています。

なお、情報セキュリティインシデント発生時には、事故・障害等の対処手順

(<https://my.osaka-u.ac.jp/admin/information/security/procedure>) に従い対処してください。

- ネットワーク侵入防止サービス（ネットワーク侵入防止システム）

ODINS を経由する学内外通信に対して、不正な通信を防止するためのサービスです。サイバー攻撃や本学に対して不利益を発生させるような通信について、本システムを用いてアクセス遮断を行います。

- 学内ネットワーク検疫サービス（不正端末検疫システム）

ODINS を経由する学内通信に対して、不正な通信、サポート終了を迎えたアプリケーションやOS、脆弱性を持つソフトウェア等による通信の監視及び防止するためのサービスです。本サービスは後述のイントラネットワーク基盤サービスと連携することで最大限の効果を発揮するシステムであるため、よりネットワーク環境を堅牢化するためにも、是非ともイントラネットワーク基盤サービスをご活用ください。

- イントラネットワーク基盤サービス（イントラネットワークシステム）

部局等のネットワーク環境をプライベートネットワーク化することを希望する管理者向けに、イントラネットワーク環境を構築及び運用するための基盤を提供するためのサービスです。本サービスを用いることで、前述の学内ネットワーク検疫サービスを最大限に利用することが可能となり、より堅牢なネットワーク環境を構築することが可能です。

イントラネットワーク基盤サービスの利用をご希望の部局は、所属部局の部局ネットワーク担当者を通じてご相談ください。

- アクセス制御サービス（ファイアウォール）

ODINS を経由するの通信に対して、アクセス制御を行うためのサービスです。ODINS が提供するグローバル IP アドレスは、独自でファイアウォールを用意して運用していない限り、本サービスを用いてアクセス制御されています。アクセスポートの設定変更等については、所属部局の部局ネットワーク担当者を通じてご相談ください。

- 有線 LAN 認証サービス

ODINS では有線 LAN 環境に認証設定を施し、利用制限を行うサービスを提供しています。ODINS が整備したネットワークスイッチに認証設定を施すことで実現します。有線 LAN 認証サービスを利用希望の方は、所属部局の部局ネットワーク担当者を通じてご相談ください。

4. ネットワーク利用にあたっての倫理事項・遵守事項

ODINS の利用は、教育研究活動又は本学の運用に必要な通信に限定されます。ネットワーク上の交流もまた社会であることを意識し、他者を思いやり健全なコミュニケーションを確立することが必要です。ODINS の利用にあたり、少なくとも本項に示す行為は避け、適切にネットワークを使用してください。

なお、ODINS では安全かつ適正な利用のために、利用者の通信履歴を記録しています。

4.1. 法令又は公序良俗に反する行為

ODINS の利用は大阪大学定めた各種ルールに加えて、国内外の法律も適用されます。特に関連の深い日本の法律として、著作権法等の知的財産に関する法律や、不正アクセス禁止法が挙げられますので、ODINS 利用のルールを遵守した上で、憲法・法律を遵守し行動してください。

4.2. 教育研究活動又は本学の運用に必要な通信以外のネットワーク利用

ODINS の利用は、教育研究活動又は本学の運用に必要な通信に限定されます。利用目的から逸脱する行為は、利用を制限し、又は停止することがあります。

4.3. ODINS の円滑な運用を妨げる行為

ODINS の運用を妨害する行為は厳禁です。例えば、物的な加害だけでなく、大量のデータ送受信によるネットワークへ高負荷をかける行為、他の利用者に迷惑をかけるような過剰な利用、ウイルス感染したパソコンやスマートフォンをネットワークに接続することが該当します。また、ウイルス感染等、予期せぬ事情で ODINS の運用の妨げになることもあり、自身が加害者にならないためにも、使用するパソコンやスマートフォンを適切に管理してください。

4.4. ODINS の安全性を脅かす行為

パスワードはあなたが正規の利用者であることを確認するために大切なものです。自分のパスワードを友人に教えたり、友人のパスワードを使ってパソコンを用いたりしてはなりません。

ん。また、パスワードを解読されないために、英数字、大文字小文字、記号等をランダムに設定することや、付箋にメモしてパソコンに貼らないこと、手帳や携帯電話機等にメモしないこと、パスワードを定期的に変更すること、パスワード管理ソフトを用いて厳重に管理することが重要です。

もし自分のアカウントが盗まれた場合、犯罪に巻き込まれ自分自身が犯人として疑われることがあります。ネットワークを安全に利用するためにも、パスワードは適切に管理し、OS やソフトウェアは常に最新版に更新を行い、ウイルス対策ソフトを導入のうえ定義ファイルは最新の定義を適用するようにしてください。

情報セキュリティを意識してネットワークを利用することはマナーです。自身が予期せず加害者とならないためにも、安全なネットワーク利用を意識して利用してください。

5. 各種利用申請書

各種申請は、部局ネットワーク担当者等を通じて行う必要があります。各種申請書は ODINS の Web ページ (<http://www.odins.osaka-u.ac.jp>) に掲載しております。

6. ODINS 関連の規定等及び本ガイドライン違反に対する措置

ODINS の運用を妨げる行為や通信を発見した場合、ネットワーク遮断等の緊急措置を行うことがあります。緊急措置が実施された場合は、安全にネットワーク運用が可能と判断されるまで解除は行いません。

不適切にネットワークを利用した者には、当該部局の部局ネットワーク担当者からネットワーク利用や情報セキュリティに関する教育・指導を行うことになります。

7. 相談窓口

各部局のネットワークに関するご相談は、各部局で定められている部局ネットワーク担当者へ一次相談窓口をお願いいたします。ご相談につきましては、各部局の部局ネットワーク担当者へご相談のほどよろしくお願いいたします。

(http://www.odins.osaka-u.ac.jp/gakunai/documents/05_member/member.pdf)。

部局ネットワーク担当者からの相談については、次の宛先までお願いいたします。

部 署：情報推進部情報基盤課研究系システム班 (ODINS 担当)
内 線：(吹田) 8815, 8816
メール：odins-room@odins.osaka-u.ac.jp

大阪大学サイバーメディア・フォーラム No. 22 2022 年 2 月発行

編集者 大阪大学サイバーメディアセンター

発行者 大阪大学サイバーメディアセンター
Cybermedia Center, Osaka University
〒567-0047 大阪府茨木市美穂ヶ丘 5-1

URL: <https://www.cmc.osaka-u.ac.jp/>

印刷所 阪東印刷紙器工業所



Cybermedia Center, OSAKA University

サイバーメディア・フォーラム
no.22